

八尾市文化財調査報告26

八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ

1992.3

八尾市教育委員会



正誤表

頁	行	誤	正
4	21	色粘質シルト	色粘性シルト
9	16	実現した限りでは	実見した限りでは
46	8	清水層である	湧水層である

## はじめに

現代の多様化する社会においては、町に潤いのある暮らしが求められるようになり、物質的な豊かさよりも心のゆとりある生活が望まれるようになってきました。今日のような歴史ブームも、このような新しい時代のニーズに他なりません。

八尾市は大阪平野の東側に位置しており、古来より大和と大阪を結ぶ交通の要所となっていました。それゆえに、市内の遺跡をみると、古く旧石器時代から近世に至るまでの人々の生活の痕跡を認めることができます。したがって本市では、社会教育部に文化財室を置き、埋蔵文化財保護の為に資料の整備に尽力してまいりました。その結果、平成3年度では、東郷遺跡や太田遺跡で今まで知られていなかった寺院の存在が判明するなど、数多くの成果を得ることができました。これらの調査の多くは開発事業に先立ち遺構の有無を確認するために行われたものであります。このような貴重な文化財をいかに保存・活用するかが新たな課題となっております。

また本年度は八尾市で文化財保護条例が施行の運びとなり、これからも積極的に文化財行政に取り組んで参る所存であります。

最後になりましたが、これらの調査にあたり御協力と御理解を頂きました関係各位に対して感謝を申し上げる次第です。

平成4年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

## 例　　言

1. 本書は、平成3年度に八尾市教育委員会が公共事業等に伴って八尾市内各遺跡で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長　田中弘）が主体となって実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財室の米田敏幸、道斎、吉田野乃が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査--覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、道、吉田が執筆を分担し、共同で編集を行なった。

## 目 次

1. 田井中遺跡（90-29）の調査 .....	1
2. 木の本遺跡（90-176）の調査 .....	3
3. 東郷遺跡（90-550）の調査 .....	28
4. 植松遺跡（90-433）の調査 .....	31
5. 中田遺跡（91-141）の調査 .....	35
6. 恩智遺跡（91-232）の調査 .....	38
7. 教興寺遺跡（91-326）の調査 .....	41
8. 中田遺跡（91-293）の調査 .....	45
9. 恩智遺跡（91-363）の調査 .....	55
平成3年度公共事業関係調査一覧表 .....	57

## 図版目次

図版1 木の本遺跡 (90-176)	S P-01・S P-02
	S P-03
図版2 木の本遺跡 (90-176)	S P-04
	S X-01
図版3 中田遺跡 (91-293)	N O 4人孔全景
	N O 4人孔S E01
図版4 中田遺跡 (91-263)	N O 4北調査区土器出土状況A地点
	N O 4北調査区土器出土状況B・C地点
図版5 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版6 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版7 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版8 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版9 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版10 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版11 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版12 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版13 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版14 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版15 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版16 木の本遺跡 (90-176)	出土遺物
図版17 中田遺跡 (91-293)	N O 4北調査区出土土器
図版18 中田遺跡 (91-293)	N O 4人孔南出土埴輪
図版19 中田遺跡 (91-293)	出土遺物
教興寺遺跡 (91-326)	出土遺物

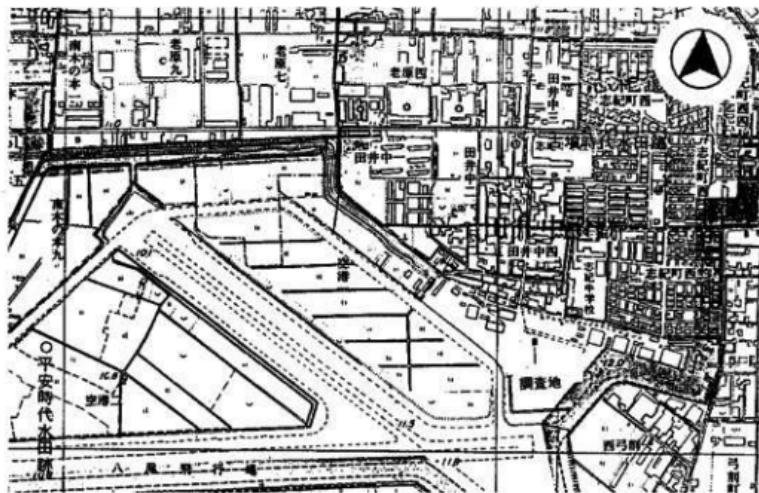
## 1. 田井中遺跡（90-29）の調査

調査地 空港一丁目

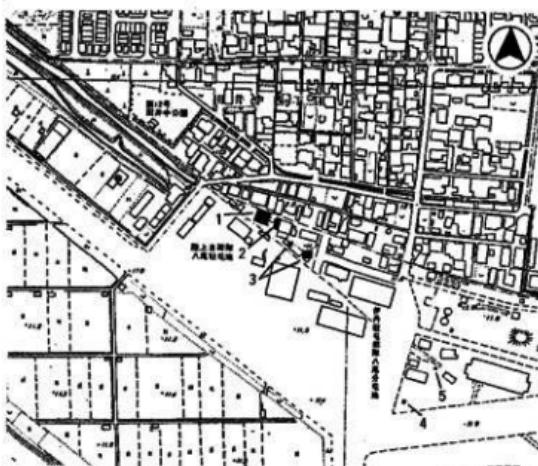
調査期間 平成3年2月6日

### 1. 調査概要

本調査は防火水槽兼プール建設に伴う遺構確認調査である。プール建設部分北側にあたる附属施設建設部分の東西4m、南北3.6mの範囲の調査を行なった。平成2年5月14日に防火水槽兼プール建設に伴う遺構確認調査にあたって設定した調査区の北東40mのところに位置する。地表下1.4mまでは重機でそれ以下3.2mまで人力で掘削を行なった。この結果、地表下2.26m～2.8m、TP 8.86m～9.42mで古墳時代中期の土器を包括する暗緑青灰色粘土層（6層）、暗灰色シルト質粘土層（7層）、灰色シルト層（8層）を確認した。特に5層には比較的多くの土器が含まれていた。またこの層は北に向かって厚くなっている。8層の下は黒灰色粘土層が0.4m以上堆積する。遺物は古墳時代中期頃に位置付けられるかと思われる高杯、壺、鉢の破片の他、サヌカイトを原材とする石器の剝片1点が出土している。

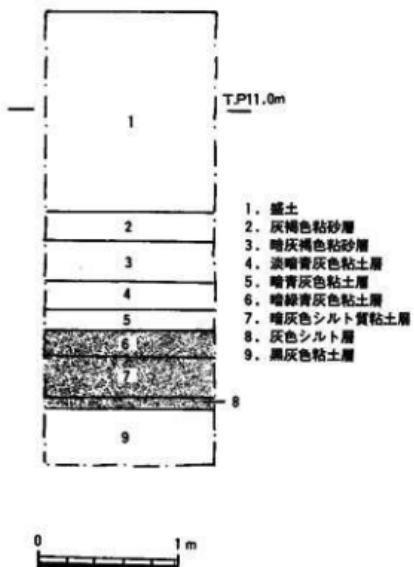


第1図 調査地周辺図 (1/13000)



第2図 調査区設定図 (1/5000)

1. (財)八尾市文化財調査  
研究会第1次調査地
2. 同第2次調査地
3. 同第5次調査地
4. 文化財宝造構確認  
調査  
90-29-1
5. 今回調査地  
(90-29-2)



第3図 東整土層断面柱状図 (1/40)

## 2.まとめ

前回の調査(90-29-1)においても本調査で確認した包含層に対応すると思われる黒灰色粘土層を、TP 9.0m～9.5m付近で確認している。また、(財)八尾市文化財調査研究会による田井中遺跡第1次・第2次においても弥生時代前期から古墳時代中期の土器を多量に含む暗灰黑色細砂混粘土層を確認している。また第2次調査ではこの包含層の下の灰青色シルト層上面で弥生時代中期と古墳時代中期の造構を、第5次調査では弥生時代前期から後期の造構をそれぞれ検出している。このような造構の存在および包含層の土器の密度の高さから本調査地周辺は弥生時代から古墳時代の集落域であった可能性が高い。なお、本調査地の北東約500mの志紀町西3丁目、田井中3丁目の調査では、古墳時代をはじめとして奈良時代から鎌倉時代の水田造構が検出されており、この付近一帯が生産域であったことがわかる。このようなことをあわせ考えると、本調査地とその周辺の成果は、生産域との関連を考える上で興味深い資料となろう。

(吉田)

## 2. 木の本遺跡 (90-176) の調査

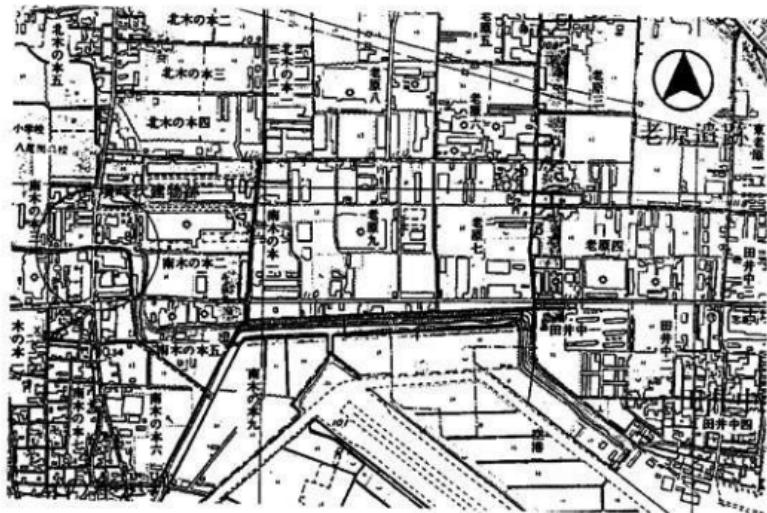
調査地 南木の本2丁目77~79, 南木の本3丁目75~79

調査期間 平成3年2月21日, 22日, 3月19, 20, 26~29日

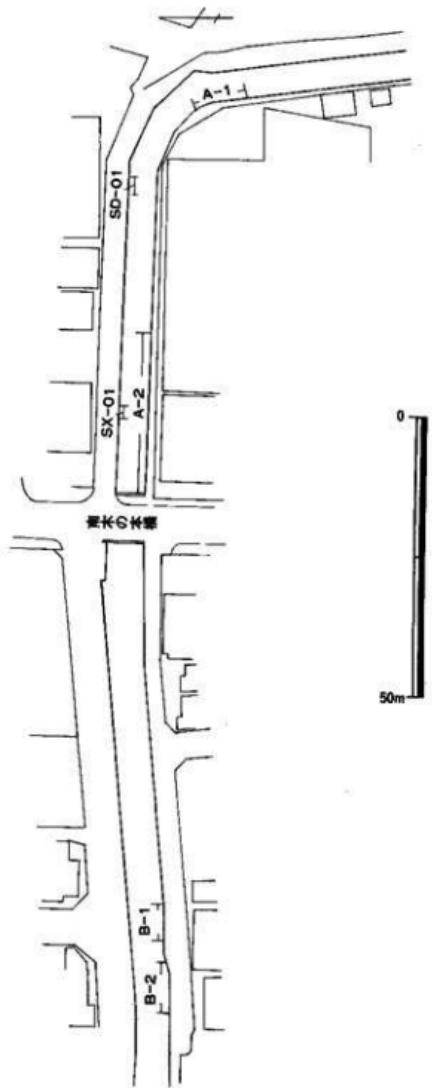
### 1. 調査概要

木の本遺跡は、古大和川の本流である長瀬川の沖積地に位置している。遺跡周辺には西に八尾南遺跡・長原遺跡、東に田井中遺跡、北に太子堂遺跡・亀井遺跡などがある。

当遺跡の発見は昭和56年に南木の本4丁目5~9番地で大手スーパーの出店に伴う遺構確認調査を八尾市教育委員会が実施し、弥生時代中期から古墳時代の遺物包含層を確認したことによる。この時の調査では、弥生時代中期前半から古墳時代中期の土坑・溝・柱穴・掘立柱建物などを検出し、また韓式土器とともに初期須恵器も出土している。(註1) その後に木の本遺跡内で行われた調査では平安時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が数多く見つかっており(註2, 3)、当遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判明している。



第4図 調査地周辺図 (1/13000)



第5図 断面実測位置図 (1/1000)

今回の調査は空港放水路改修工事に伴つて実施されたものである。本調査地近辺では上述の昭和56年度の調査と平成2年度には(財)八尾市文化財調査研究会による調査(註4)、さらに大阪府教育委員会によつて昭和63年に北堀改修工事に伴う調査がなされており、本調査と併せて遺構の拡がりが確認できるものである。

調査方法は断面観察と遺物採集を中心に行つた。これは担当者が現地へ向かった時点では改修工事は既に始まっており、かなりの部分の掘削が終了していた為である。また、南木の本橋を境として調査区の東側をA区、西側をB区とし、断面実測地点をそれぞれA-1区・A-2区、B-1区・B-2区とした。

次にそれぞれの調査区での検出遺構について記述する。

#### A-1区

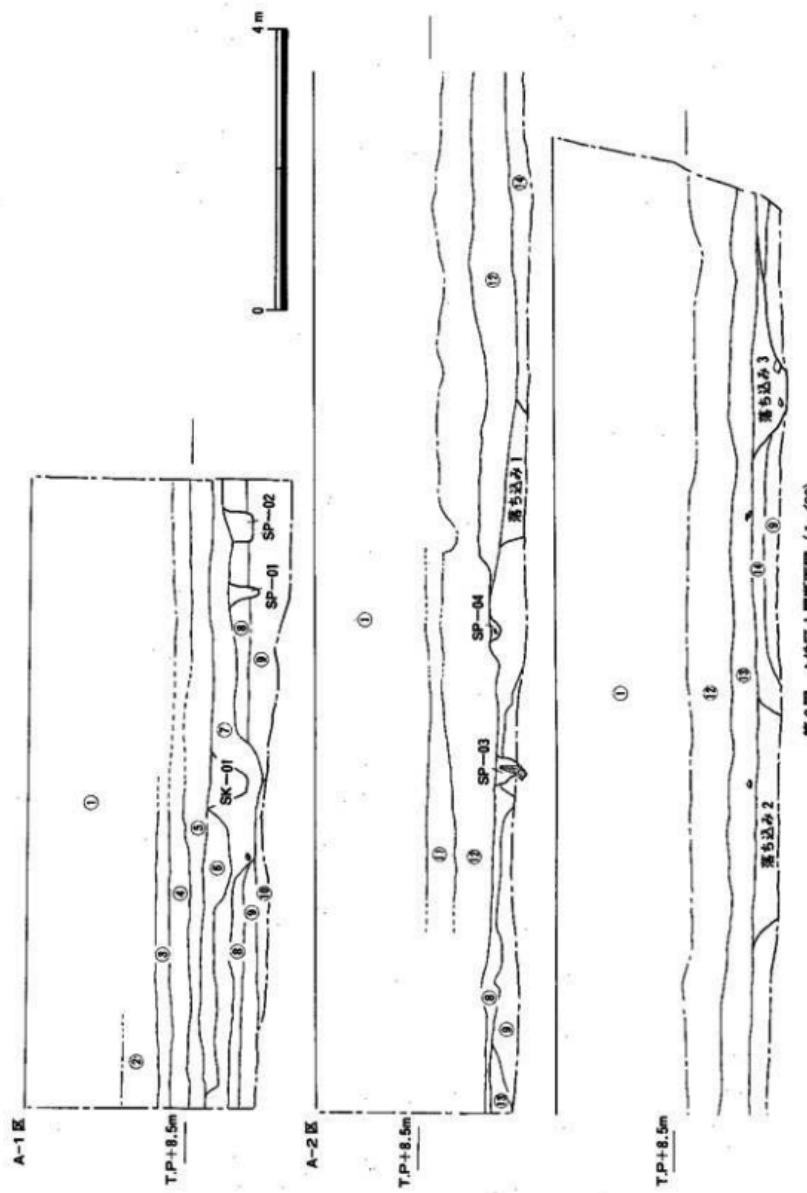
〔SK-01〕 幅0.8m、深さ0.52m、暗灰色粘質シルトを切り込む遺構である。

埋土は淡緑灰色シルトで暗灰色のブロックが混入する。167の韓式土器が出土している。T.P+8.23m

〔SP-01〕 上幅0.36m、深さ0.32m、暗灰色粘性シルト上で検出。埋土は暗灰色砂質シルト。T.P+8.01m

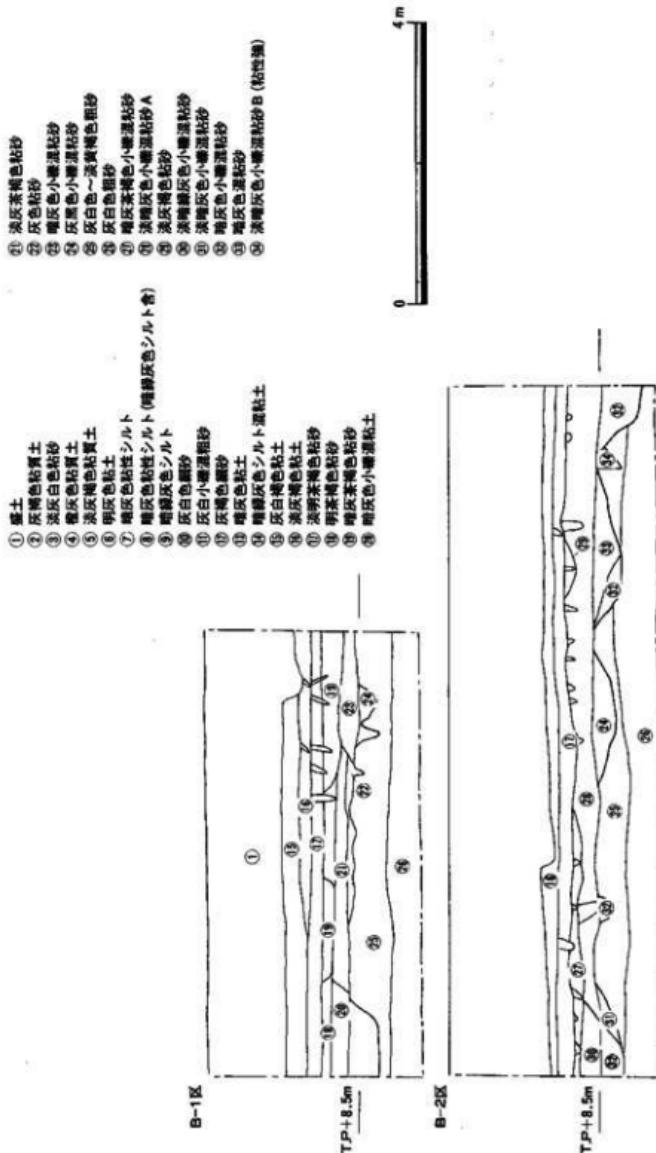
〔SP-02〕 上幅0.44m、深さ0.39m、SP-01と同一面で検出。埋土は淡灰緑色粘性シルトでブロックが混入する。T.P+8.09m。

#### A-2区



第6図 A地区土壤断面図 (1/80)

第7図 B地区土層断面図 (1/80)



[S P -03] 上幅0.45m、深さ0.34m、暗灰色粘性シルト(暗緑灰色シルト含)層を切り込んでいる柱穴である。埋土は暗灰色シルト混粘土。ピット内には15.8cm×10.6cm×0.2cmの礎板と幅8.4cmの柱痕(第15図下)が遺存していた。礎板の裏面は鋭利な刃物で仕上げられている。柱痕は残存高22.4cmで底部には刃物による削痕がみられる。上部は焼け焦げており、火災にあったと思われる。また、埋土中より格子叩きを施した韓式土器片が出土している。T.P+7.46m

[S P -04] 上幅0.39m、深さ0.12m、埋土は暗灰色砂質土で炭を含む。土師器、須恵器の小片が出土している。T.P+7.52m

[落ち込み1] 上幅2.14m、完掘していないが深さは、現状では0.3mを測る。暗緑灰色シルト混粘土を切り込む。埋土は暗灰色粘土(炭を含む)。遺物は7・8のほか、古墳時代中期に比定できる土師器・須恵器などが出土している。T.P+7.43m

[落ち込み2] 上幅3.57m、深さは現状では0.32mを測り、埋土は暗灰色粘土で炭を含む。出土遺物は1~6で初期須恵器、韓式土器を含んでいる。T.P+7.37m

[落ち込み3] 上幅3.18m、深さは現状では0.35mを測る。埋土は暗灰色シルト混粘土で、落ち込みのなかで、最も多く遺物が出土している。11~16のほかに格子叩きの韓式土器片、布留式新相の壺、壺片が出土している。T.P+7.48m

B地区は、A地区と比較すると遺物量は少ない。また、遺物を出土する顕著な遺構を検出することはできなかった。それ故に、遺物の出土した層を中心にみていくたい。

#### B-1区

⑦淡明茶褐色粘砂-土師器及び瓦器の小片が出土している。この層の上面では杭跡が確認できた。

⑧暗灰色小礫混粘砂-土師器及び須恵器の小片が出土している。この層が古墳時代の包含層となり、下部層の⑨灰白色~淡黃褐色粗砂を切り込む形で溝状遺構やピットがみられる。溝状遺構とピットの埋土は灰黒色小礫混粘砂で、やはり土師器や須恵器片が出土している。⑨層以下は砂層で⑨を含めて約1.4m以上の厚さで堆積している。

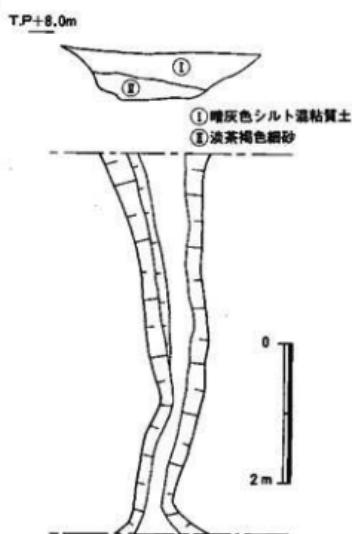
#### B-2区

B-1区と同じく⑦淡明茶褐色粘砂層で土師器及び瓦器の小片がみられ、層上面で杭跡が確認できるがB-1区ほど多くはない。⑧淡暗灰色小礫混粘砂はB-1区の古墳時代の包含層である⑨暗灰色小礫混粘砂と対応する層と思われる。⑨層上面では杭跡や溝、落ち込み等がきりこんでいる。⑨層の下部の⑩層ではB-1区よりも多くの遺構が確認できた。断面だけでは明確にわからないが、溝あるいは土坑状の遺構が4箇所でみられる。これらすべてから遺物は出土していないが、一部で須恵器の杯身片などが出土している。

次にA区で検出し、多くの遺物が出土した2つの遺構、SD-01とSX-01について記述する。

[SD-01] T.P.+7.82mの淡緑灰色シルト層を切り込んでいた南北に伸びる溝である。上幅約2.8m、深さ約0.66mで、検出した長さは約5.4m。埋土は2層に分けることができ、I層は暗灰色シルト混粘質土、II層は茶褐色細砂である。遺物はI層とII層上面から出土し、II層では若干量がみられただけである。I層の出土遺物は28~58で、5世紀後半から6世紀初頭に比定できる。II層上面付近出土遺物は59~97で、5世紀中頃から後半に比定できる。遺物はSD-01のほぼ中央から南寄りで多く出土し、北側では少なかった。これらの遺物は廃棄されたのではなく、残存状況からみて意図的に破壊し、溝に投棄したものと考えられる。

なお、第8図の平面図は機械掘削終了後に実測したもので、溝幅は断面図の上幅と合致しない。



第8図 SD-01平面図、断面図(1/80)

[SX-01] 淡緑灰色シルト層を切り込んだ遺構で、上幅約1m、深さは完掘していないため全容は不明であるが0.8m以上である。埋土は2層に分けることができ、①層は暗灰色シルト混粘土、②層は暗灰色粘質シルトである。①層には炭が混じっており、②層では植物片がみられ、加工木も混っている。第16図に掲載した槍状に加工された木片も②層から出土したものである。出土遺物は17~27である。この内23のみ②層出土で、5世紀中頃に比定できる。SX-01は性格が明確ではないが井戸と思われる。なお、平面は検出部分では1/4円形を呈していた。



第9図 SX-01断面図(1/40)

### 3. まとめ

今回の調査では古墳時代中期に比定できる遺構・遺物を検出することができた。特に、SK-01、SP-03、SD-01、落ち込み2、3では韓式土器や初期須恵器が出土しており、5世紀中頃の遺構として位置づけることができる。これらのなかで、最も多く遺物が出土したのはSD-01で、コンテナに2箱分である。しかし、破片が大半で復元できるものはなかった。遺物の正確な比率はだしてはいないが、甕・高杯の割合が多く、高杯は杯部、裾部は少なく、柱状部のみの部位が目立つ。

また、SP-03は柱根が残っており、掘立柱建物の一部と考えられる。掘立柱建物は前述の昭和56年度の調査でも検出されており、木の本遺跡は古墳時代中期に集落として最も発展を遂げた時期と考えられる。この時期に韓式土器は当遺跡だけでなく、周辺では八尾南遺跡、長原遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡等で出土しており、いずれも弥生時代末から古墳時代中期にかけて集落の規模が大きくなっていく。これらの遺跡間でどのような関係があったのかはこれから課題であろう。ただ、このSP-03の柱根は焼けた痕があり、SX-01から出土した加工木も黒く煤けていることから、なんらかの事情で火災があったことは指摘できよう。

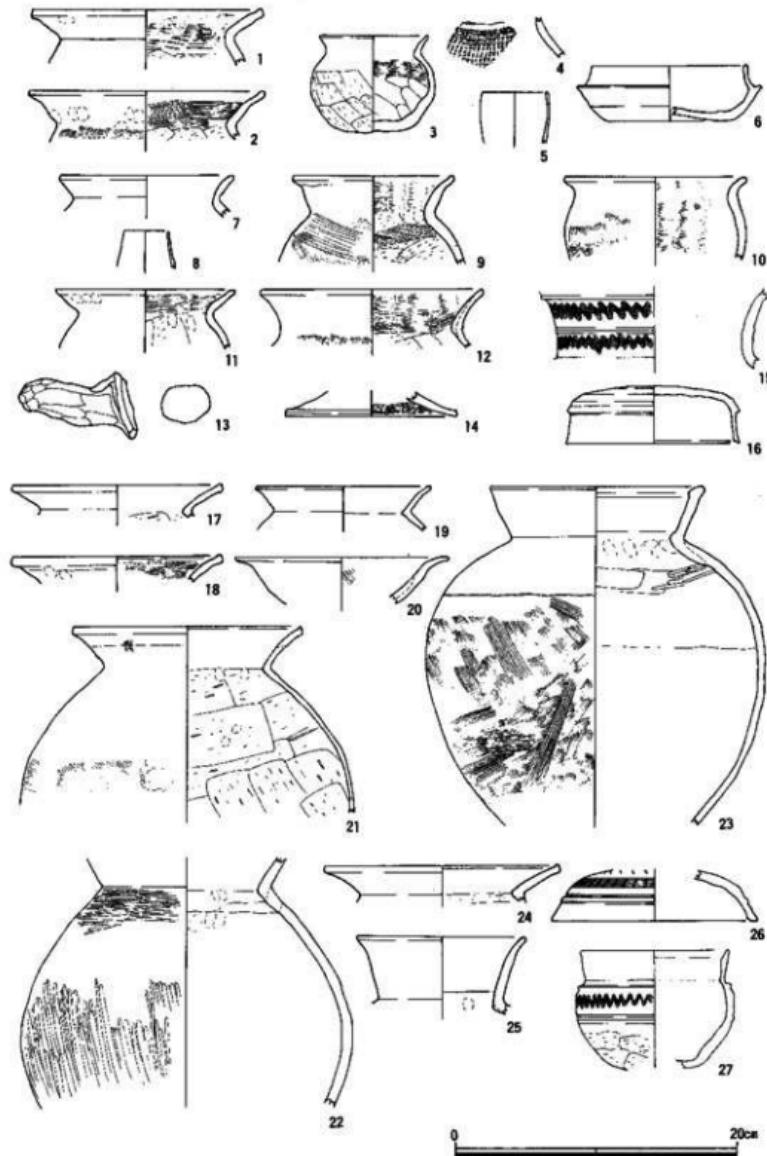
本調査では、木の本遺跡の北への拡張も確認できた。前述の大坂府教育委員会による北掘の出土遺物（註5）を実現した限りでは時期的なずれではなく、同一集落あるいは遺構面と捉えることができ、半径250m前後の範囲で集落が成立していた可能性がある。今後の周辺での調査に期待したい。

本調査は、河川改修に伴う発掘調査の困難さと十分な協議が行われていなかったことが相まって決して良好な状況の下で行われたものではなかった。

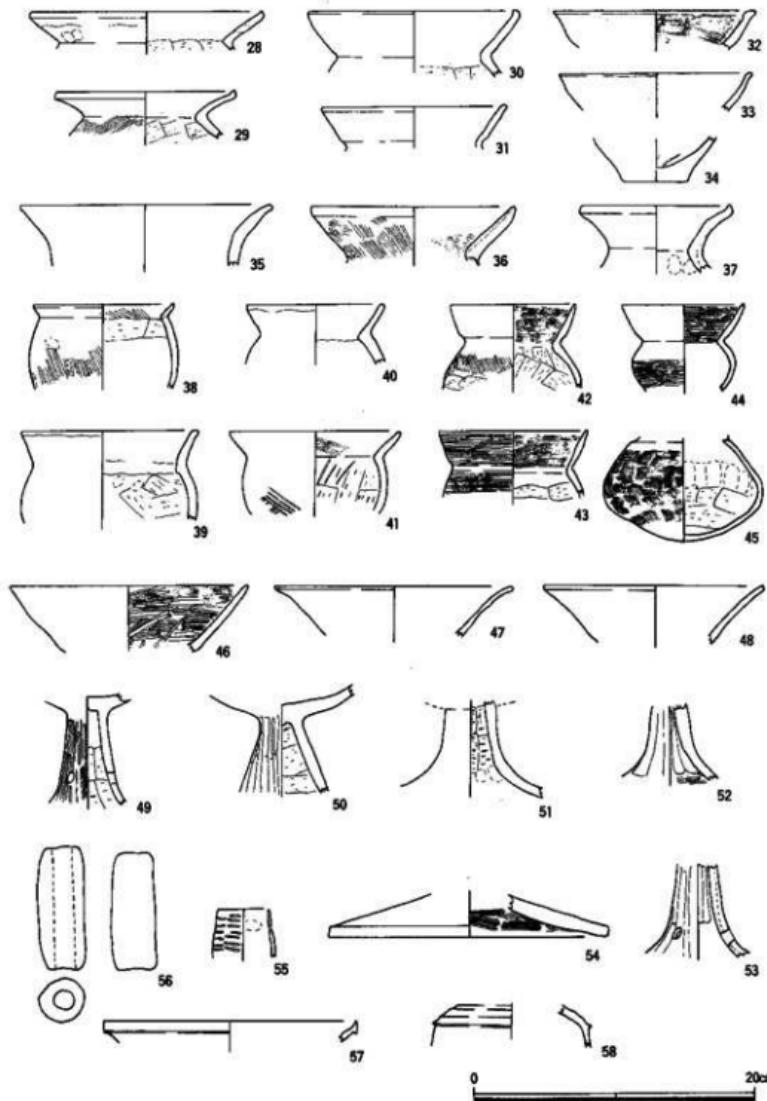
最後に、このような状況で調査に参加してくれた補助員の皆さんに感謝します。 (注)

### 参考文献

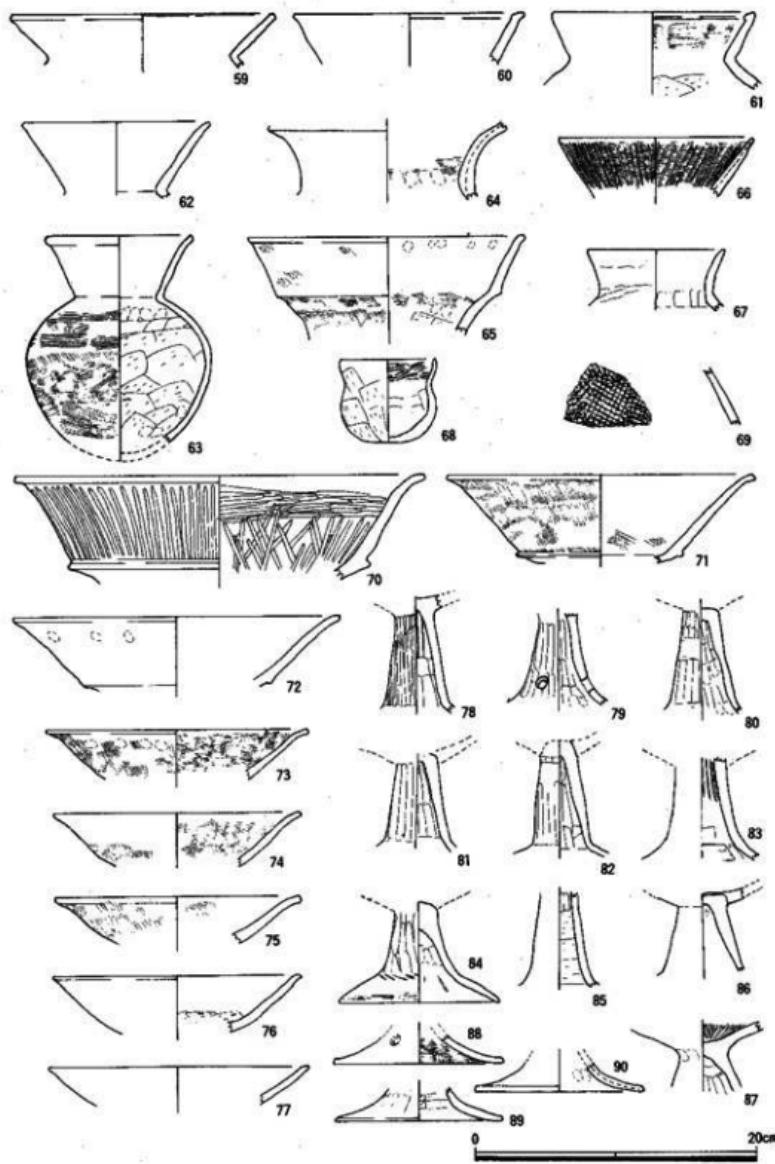
- (註1) 八尾市教育委員会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』1983
- (註2) 八尾市教育委員会『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査 その成果と概要』1983
- (註3) (財)八尾市文化財調査研究会『木の本遺跡一八尾空港整備事業に伴う発掘調査』1984
- (註4) (財)八尾市文化財調査研究会『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1984
- (註5) 内部資料による



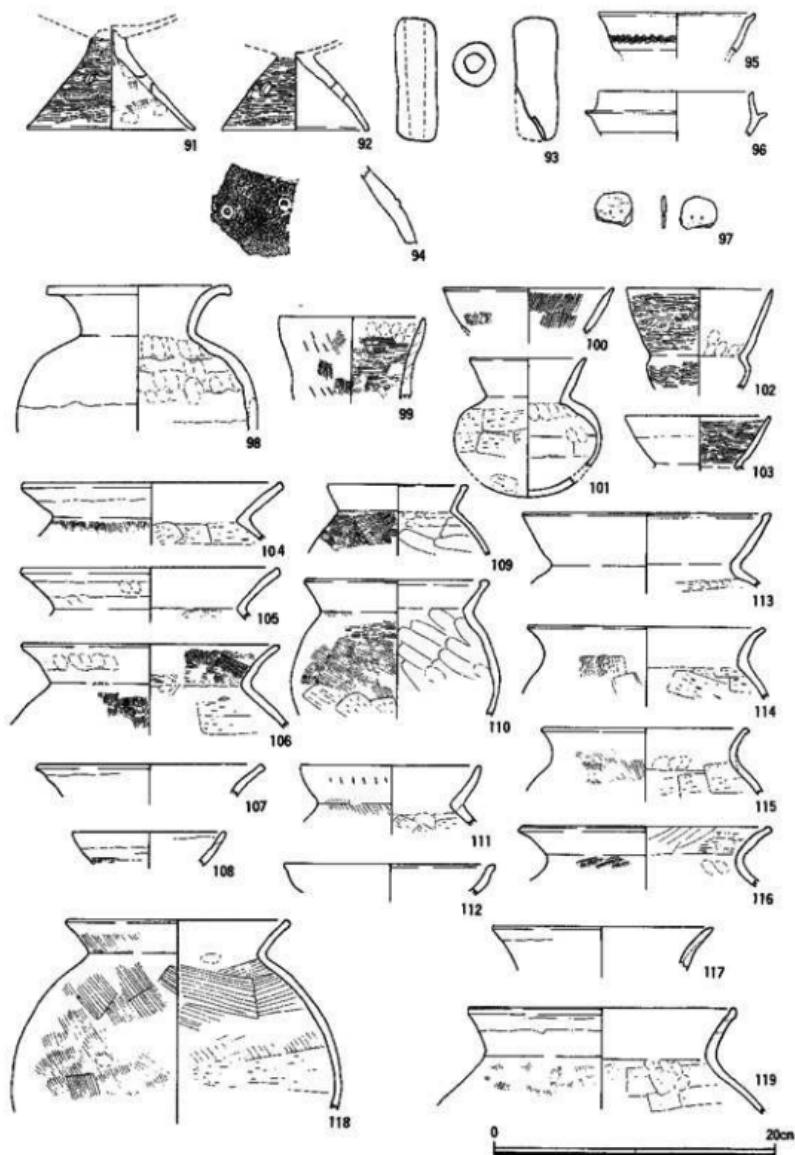
第10図 落ち込み1~3(1~16)、SX-01(17~27)出土遺物実測図(1/4)



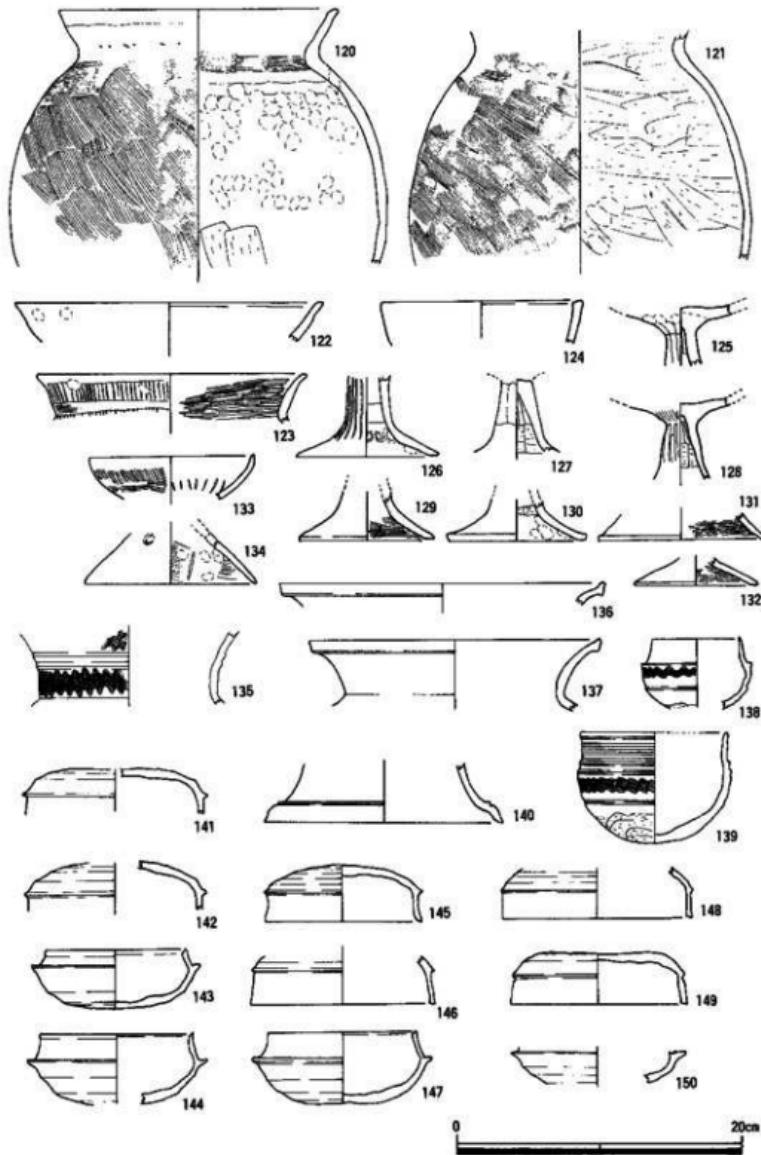
第11図 SD-01出土遺物実測図 (1/4)



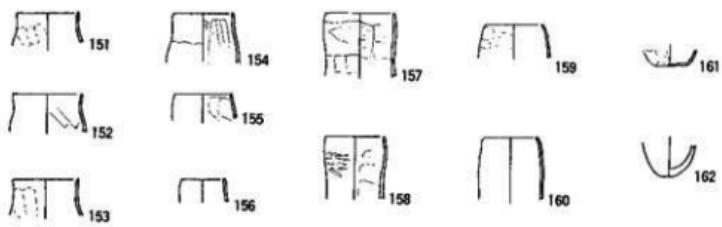
第12図 SD-01出土遺物実測図 (1/4)



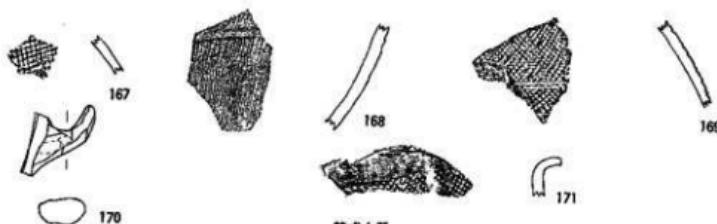
第13図 SD-01(91~97) 及び包含層出土物実測図 (1/4)



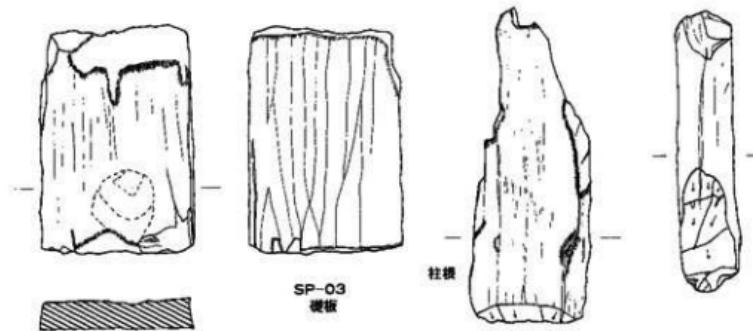
第14図 包含層出土遺物実測図 (1 / 4)



製塙土器

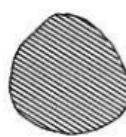


轉式土器



SP-03  
模板

柱模



SX-01  
出土加工木

第15図 出土遺物実測図 (1 / 4)

## 遺物観察表

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調 整 の 等 階	黏 土	色 調	焼成	備 考
1	甕	口縁部	16.2	3.7	外面 ナデ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母(0.1mm)	淡茶色	良好	落込み2
2	甕	口縁部	16.5	3.6	外面 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母	暗茶褐色	良好	落込み2
3	壺	完形	7.5	6.8	外面 口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ 内面 1/3上位ハケメ、以下ユビナデ	やや粗 長石・石英(1mm)	乳淡茶色	良好	落込み2
4	壺	底部	/	2.6	外面 格子タキ 内面 ナデ	精良	灰白色	堅板	落込み2 頑恙器
5	製塙 土器	体部	4.5	3.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 繩(5mm)	淡褐色	良好	落込み2
6	杯身	体部1/4	10.1	3.9	外面 受部端より3.1cm以上目伝ケズリ 内面 回転ナデ	良 繩(0.5mm)	暗灰色	堅板	落込み2 頑恙器
7	甕	口縁部	12.0	2.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石・石英・角閃石(0.1mm)	暗茶褐色	良好	落込み1
8	製塙 土器	体部	3.1	2.4	外面 粗いユビナデ 内面 ヨコナデ	精良	淡黃白色	軟質	落込み1
9	甕	口縁部	10.2	6.1	外面 口縁部ナデ、体部ハケメ 内面 口縁部ハケナデ、体部ヘラケズリ	やや粗 長石・雲母・チャート	淡茶褐色	良好	落込み3
10	甕	口縁部	12.5	5.9	外面 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面 口縁部ハケメ(7.6cm)、體部粗、斜ヘラケズリ	良 長石・赤色砂粒・金雲母	淡灰白色	良好	落込み3
11	甕	口縁部	12.6	4.2	外面 ナデ 内面 口縁部ハナナデ、體部粗、斜ヘラケズリ	粗 長石・石英・雲母	淡茶灰色	良好	落込み3
12	壺	口縁部	15.5	4.1	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母(0.1mm)	淡茶褐色	良好	落込み3
13	瓶	把手	/	/	外面 ナデ、ヘラナデ 内面 ——	粗 長石・石英・チャート・ 雲母(0.1-1mm)	淡茶褐色	良好	落込み3
14	高杯	底部	12.1	1.6	外面 ナデ 内面 ハケメ	精良	乳淡茶色	良好	落込み3

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎上	色調	焼成	備考
15	盞	盤部	/	5.3	外面 中央に凹窓を基らし、それを界して2条の波状文を施す	精良	暗青灰色	堅焼	落込み3 須志器
16	杯蓋	外縁1/2	12.2	4.0	外面 縁端より0.8cm以上の鋸歯ケズリ、鋸歯ナデ	精良	淡灰色	堅焼	落込み3 須志器
17	甕	口頭部	15.0	2.2	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・雲母(0.1mm)	淡灰褐色	良好	S X-01上層
18	甕	口縁部	14.7	1.9	外面 ヨコナデ、指頭痕 内面 ハケメ	やや粗 長石・石英・雲母	淡茶褐色	良好	S X-01上層
19	甕	口頭部	12.3	3.0	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	粗 雲母・角閃石(1mm) 長石・石英	暗茶褐色	良好	S X-01上層
20	鉢	杯部	15.0	3.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ハケメ	やや粗 長石・石英・雲母(0.1mm)	橙茶色	良好	S X-01上層
21	甕	口頭部	16.3	22.5	外面 腹部ハケメ、上部は小凹 内面 ヘラケズリ	粗 石英(1mm)、金雲母 長石(3mm)	淡茶褐色	良好	S X-01上層
22	甕	頭部 体部	12.0	17.7	外面 頭部ヨコナデ、体部ヘラミガキ優ナデ 内面 ナデ、指頭痕	やや粗 石英・雲母・くさり織 長石(5mm)	橙茶褐色	良好	S X-01
23	甕	出光形 底部なし	15.2	24.1	外面 ハケメ 内面 ナデ、底部に指頭痕	良 長石(0.4mm) 金雲母・角閃石	暗茶灰色	良好	S X-01下層
24	甕	口頭部	16.4	2.7	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・雲母	淡茶褐色	良好	S X-01
25	甕	口頭部	11.8	4.9	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、指頭痕	やや粗 長石・石英・雲母	淡茶色	良好	S X-01
26	杯蓋	口縁1/2	14.4	3.7	外底 固結ナデ 内底 固結ナデ	精良	灰色	堅焼	S X-01 須志器
27	碗	体部1/3	10.4	8.5	外底 口縁部-体部中段ナデ、唇部ヘラケズリ 内底 鋸歯ナデ	良 砂粒(0.2mm)	淡灰色	堅焼	S X-01 須志器
28	甕	口頭部	16.5	2.6	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ	やや粗 石英・角閃石・雲母(0.1-1mm) 長石	淡灰褐色	良好	S D-01上層
29	甕	口頭部	12.7	3.1	外面 口縁部ヨコナデ、腹部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ	やや粗 石英・金雲母(0.1-2mm) 長石	淡茶灰色	良好	S D-01上層

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎土	色調	焼成	備考
30	甕	口縁部	14.7	4.4	外面 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ	やや粗 石英・金雲母	外 黒色 内 淡茶色	良好	SX-01上層
31	甕	口縁部	13.2	3.1	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良 0.2mmの砂粒で含む	茶黒色	良好	SX-01上層
32	甕	口縁部	14.2	2.5	外面 ヨコナデ 内面 ハケメ	粗 長石・金雲母	淡灰茶色	良好	SX-01上層
33	甕	口縁部 底径	13.6 2.6		外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石(0.1mm)	外 煙付青 内 明茶褐色	良好	SX-01上層
34	甕	底部	4.3	3.2	外面 刺落不明 内面 刺落不明	粗 長石(3mm)・石英・チャート	淡茶色	良好	SX-01上層
35	甕	口縁部	17.9	4.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石・金雲母(0.1mm)	外：煙付青 内：茶褐色	良好	SX-01上層
36	甕	口縁部	14.6	3.9	外面 ハケナデ(9本/1.3cm) 内面 ヨコナデ、下位ヘラケズリ	粗 長石・石英(1~2mm)	淡茶灰色	良好	SX-01上層
37	甕	口縁部	10.3	4.4	外面 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ユビナデ	やや粗 石英 角閃石(1~3mm)チャート	淡茶灰色	堅微	SD-01上層
38	甕	口縁部	10.0	5.9	外面 口縁部ナデ、体部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、腹部ヘラケズリ、体部ナデ	精良	暗茶灰色	堅微	SD-01上層
39	甕	口縁部	11.4	6.4	外面 ナデ 内面 口縁部基ナデ、体部ヘラケズリ	粗 長石・石英・チャート (0.1~1mm)	外：煙付青 内：茶褐色	良好	SD-01上層
40	甕	口縁部	9.6	4.0	外面 口縁部ヨコナデ、腹部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ	良 金雲母(0.1mm)	外：明茶褐色 内：暗灰茶色	良好	SD-01上層
41	甕	口縁部	12.1	5.8	外面 ナデ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・雲母	茶褐色	良好	SD-01上層
42	甕	口縁部	8.8	5.9	外面 口縁部ヨコナデ、体部上位ハケメ、ヘラケズリ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	良 長石・石英・チャート	淡茶色	良好	SD-01上層
43	甕	口縁部	10.5	4.5	外面 ヘラミガキ部分的にハケメ 内面 口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	精良	暗茶色	良好	SD-01上層
44	甕	出光定形 底なし	8.6	6.1	外面 ヨコナデ、体部1/2ヘラミガキ 内面 口縁部ヘラミガキ	精良	淡茶褐色	良好	SD-01上層

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調整の特徴	胎土	色調	焼成	備考
45	壺	体部—底部	/	7.4	外面 ハケメ 内面 中腹スピナデ、下位ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・チャート	淡灰褐色	良好	SD-01上層
46	高杯	杯部	16.7	4.6	外周 刺落不明 内面 ハケメの後ヘラミガキ	精良	棕茶色	良好	SD-01上層
47	高杯	杯部	16.5	3.3	外周 刺落不明 内面 刺落不明	良 長石・金雲母・角閃石(0.1mm)	淡茶灰色	良好	SD-01上層
48	高杯	杯部	15.4	4.1	外周 刺落不明 内面 刺落不明	良 角閃石・金雲母(0.1mm)	茶褐色	良好	SD-01上層
49	高杯	柱状部	柱状部 2.8	7.5	外周 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	粗 長石・金雲母・石英(0.1mm)	乳淡茶色	良好	SD-01上層
50	高杯	杯部下段—柱状部	柱状部 3.9	6.9	外周 杯部小テ、柱状部ヘラミガキ 内面 杯部ナデ、柱状部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母(0.1mm)	淡茶褐色	良好	SD-01上層
51	高杯	柱状部	柱状部 3.7	6.7	外周 ナデ 内面 上位ヘラケズリ、下位ナデ	やや粗 長石(2mm)・石英・チャート	棕茶色	良好	SD-01上層
52	高杯	柱状部	柱状部 2.5	5.2	外周 ヘラナデ 内面 ヘラナデ、粗毛ハケメ	やや粗 長石・角閃石	淡茶灰色	良好	SD-01上層
53	高杯	柱状部	柱状部 2.8	6.3	外周 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	やや粗 長石・チャート・石英	淡橙茶色	良好	SD-01上層 透孔 3つ
54	高杯	脚部	脚部 20	3	外周 刺落不明 内面 ハケメ	やや粗 長石・石英・雲母(0.1~1mm)	赤茶色	良好	SD-01上層
55	製塙 土器	体部	3.5	3.3	外周 タタキ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石・チャート	暗赤褐色	良好	SD-01 上層
56	土垂	完形	3.3	9.7	外周 ナデ 内面 —	やや粗 長石・石英・チャート	淡茶褐色	良好	SD-01 I層
57	壺	口縁部	17.8	1.4	外周 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	灰色	堅密	SD-01上層 須恵器
58	杯蓋	大井部	/	2.9	外周 棱端より0.8cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅密	SD-01上層 須恵器
59	壺	口縁部	18.4	3.6	外周 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	粗 長石 金雲母・角閃石(1~3mm)	茶褐色	良好	SD-01 上下層

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	測定の特徴	胎上	色調	焼成	備考
60	壺	口縁部	16.2	3.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石 石英・雲母(0.5~1mm)	決檻茶色	良好	SD-01 上下層
61	壺	口縁部	14.3	5.7	外面 「縁部ヨコナデ、各面上部ハケナデ 内面 口縁部ハケナデ、各面上部ハラケズリ」	やや粗 長石 石英・雲母(1mm)	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
62	壺	口縁部	13.2	5.1	外面 刺毛不明 内面 刺毛不明	やや粗 長石(2mm)・石英・チャート	淡茶色	良好	SD-01 上下層
63	壺	出流部 底なし	10.4	(15.8)	外面 口縁部ヨコナデ、体部ハケナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	やや粗 長石(1mm) 石英・チャート・金雲母	橙茶色	良好	SD-01 上下層
64	壺	口縁部	/	5.0	外面 ヨコナデ 内面 ハケナ・指密度	やや粗 長石・石英・輝(2mm)	淡灰茶色	良好	SD-01 上下層
65	壺	口縁部	19.7	7.2	外面 1道ハケナデナメ、下位ハケナメ(10本/cm) 内面 口縁部ハケナメナメ、下位ハラケズリ	やや粗 長石・角閃石を含む	淡茶灰色	良好	SD-01 上下層
66	壺	頭部	13.5	4.4	外面 ハラミガキ後放射状のミガキ 内面 ハラミガキ後放射状のミガキ	精良	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
67	壺	口縁部	9.6	4.0	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗 角閃石・雲母(0.1mm)	淡茶灰色	良好	SD-01 上下層
68	壺	口縁部	6.6	5.9	外面 ハラケズリ 内面 ハラナデ、ユビナデ	粗 長石・雲母(0.1mm位)	淡灰茶色	良好	SD-01 上下層
69	壺	口縁部	/	4.2	外面 猪子タキ 内面 ナデ	やや粗	暗茶色	良好	SD-01 上下層
70	高杯	完形	29.2	7.5	外面 ハラミガキ 内面 ハラミガキ	やや粗 長石(3mm)石英	淡櫻茶色	良好	SD-01 上下層
71	高杯	脚部	21.6	6.2	外面 ヨコナデ後ハケナデ 内面 ナデ部分的にハケナデ	やや粗 長石・石英・金雲母	淡櫻茶色	良好	SD-01 上下層
72	高杯	杯部	23.2	4.2	外面 刺毛不明 内面 刺毛不明	やや粗 長石・輝(2mm)・金雲母	淡茶色	良好	SD-01 上下層
73	高杯	杯部	18.6	3.6	外面 ハケメ(10本/1.5cm) 内面 ハケメ(10本/1.5cm)	やや粗 石英・雲母・チャート(1mm) 長石	橙茶色	良好	SD-01 上下層
74	高杯	杯部	17.5	3.8	外面 ハケメ 内面 ハケメ	精良	良好	良好	SD-01 上下層

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎上	色調	焼成	備考
75	高杯	杯部	17.3	3.3	外面 ハケメの後ナデ 内面 ハケメの後ナデ	やや粗 長石(1~3mm)英・鉱物等	棕茶色	良好	SD-01 上下層
76	高杯	杯部	17.5	4.1	外面 上位ヨコナデ、中位ナデ 内面 上位ヨコナデ、中位ヘラケズリ	やや粗 長石・石英	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
77	高杯	柱状部	18.5	2.8	外面 刺落不明 内面 刺落不明	精良	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
78	高杯	柱状部	/	7.9	外面 ハラミガキ 内面 ヘラナデ	精良	淡橙茶色	良好	SD-01 上下層
79	高杯	柱状部	/	5.2	外面 ハラミガキ 内面 ヘラナデ	精良	淡灰茶色	良好	SD-01上下層 透孔3つ
80	高杯	柱状部	/	7.1	外面 ハラミガキ 内面 ヘラナデ、ユビナデ	精良	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
81	高杯	柱状部	/	6.4	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	やや粗 長石・雲母・角閃石	乳白色	良好	SD-01 上下層
82	高杯	柱状部	/	7.8	外面 ハラミガキ 内面 ヘラナデ	精良	淡橙茶色	良好	SD-01 上下層
83	高杯	柱状部	/	6.7	外面 ナデ 内面 シボリ目	やや粗 長石・石英・角閃石	淡橙茶褐色	良好	SD-01 上下層
84	高杯	柱状部	杯径 11.2	7.2	外面 柱状部ヘラミガキ、基部ナデ、ハケメ 内面 ユビナデ	精良	暗灰色	良好	SD-01 下層
85	高杯	柱状部	/	6.5	外面 ナデ 内面 ヘラケズリ	精良	淡灰茶色	良好	SD-01 上下層
86	高杯	杯部下位 —柱状部	/	5.8	外面 ナデ 内面 シボリ目、ナデ	やや粗 長石・石英(1 mm)	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
87	高杯	柱状部	/	4.2	外面 ナデ 内面 杯部ヘラミガキ、柱状部ヘラナデ	やや粗 石英	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
88	高杯	杯部	杯径 12.0	1.6	外面 ナデ 内面 ハケナデ	精良	棕色	良好	SD-01上下層 透孔3つ
89	高杯	杯部	杯径 10.8	2.3	外面 ヨコナデ 内面 上位ヘラケズリ、下位ヨコナデ	精良	淡茶色	良好	SD-01 上下層

番号	部種	部位	法量 様	cm 現高	調査の特徴	粘土	色調	焼成	備考
90	高杯	底部	標準 11.8	2.0	外側 ナデ 内面 ユビナデ	精良	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
91	器台	脚部	11.8	7.0	外側 ハラミガキ 内面 ハケナデ、指痕痕	精良	淡茶灰色	良好	SD-01上下層 透孔3つ
92	器台	脚部	10.2	5.5	外側 ハラミガキ 内面 刺毛不明	精良	淡茶褐色	良好	SD-01上下層 透孔3つ
93	土壺	ほぼ完形	3.0	8.7	外側 ナデ 内面 ——	粗 磨(6mm) 長石・石英・雲母	淡茶褐色	良好	SD-01 上下層
94	壺	体部	/	3.1	外側 ハケ 内面 ナデ、指痕痕	やや粗 石英(5mm)全雲母・長石	淡茶色	堅密	SD-01上下層 燒窓跡
95	壺	口縁部/4	10.8	2.7	外側 回転ナデ、波状文 内面 回転ナデ	精良	黒灰色	堅密	SD-01上下層 燒窓跡
96	杯蓋	口縁部/4	10.9	3.1	外側 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	良好	SD-01 上下層
97	双孔 円盤	/	/	2.6	外側 —— 内面 ——	—		良好	SD-01 上下層
98	壺	口縁部	12.8	10.2	外側 ナデ 内面 体部指痕痕	やや粗 長石・角閃石・雲母	暗オリーブ色	良好	
99	壺	口縁部	10.3	5.6	外側 ハケメ 内面 指痕痕、ハケメ	やや粗 長石・石英・雲母	淡茶灰色	良好	
100	鉢	口縁部	12.3	3.1	外側 部分的にハケメが残る 内面 ハラミガキ	精良	淡茶褐色	良好	
101	壺	口縁部	8.2	9.8	外側 口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ	良 長石・角閃石・雲母	条褐色	良好	
102	壺	口縁部	10.2	7.1	外側 ハラミガキ 内面 ヨコナデ、指痕痕	精良	淡橙茶色	良好	
103	壺	口縁部	10.2	3.7	外側 ヨコナデ 内面 ハケメ	精良	淡橙茶色	良好	
104	壺	口縁部	18.4	3.9	外側 口縁部ヨコナデ、裏部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、裏部ハラケズリ	やや粗 良石 石英・角閃石・雲母	淡茶灰色	良好	

番号	岩種	部位	法量 kg	cm 深高	測定の特徴	粉 土	色 調	焼成	備 考
105	變	LJ縫部	16.3	3.4	外面 ナデ、縫合部 内面 口縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母	淡茶灰褐色	良好	
106	變	口縫部	18.2	5.7	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメ 内面 口縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	良 長石・石英(0.1mm)	淡茶褐色	良好	
107	變	LJ縫部	16.2	2.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石・石英・雲母	淡褐色	良好	
108	變	口縫部	10.7	2.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 砂(3mm)	淡橙茶色	良好	
109	變	口縫部	10.0	4.9	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメ(7本/cm) 内面 LJ縫部ヨコナデ、縫部ヘラナデ	やや粗 長石・石英・雲母	明茶色	良好	
110	變	LJ縫部～ 体部	13.0	9.8	外面 LJ縫部ヨコナデ、縫部ハケメ (22本/2.3cm) 内面 LJ縫部ヨコナデ、体部ユビナデ	やや粗 長石・石英・雲母(0.1mm)	暗茶褐色	良好	
111	變	口縫部	12.9	4.0	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメ 内面 口縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	稍良	暗茶褐色	良好	
112	變	口縫部	14.9	1.2	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 石英・金雲母(0.1mm)	橙茶色	良好	
113	變	LJ縫部	17.7	4.9	外面 ヨコナデ 内面 LJ縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・雲母	橙色	良好	
114	變	口縫部	16.7	4.9	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメ 内面 LJ縫部ヨコナデ、縫部上部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母	茶褐色	良好	
115	變	口縫部	14.2	4.5	外面 LJ縫部ヨコナデ、縫部ハケメ (11本/1.5cm) 内面 口縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	稍良	淡橙茶色	良好	
116	變	LJ縫部	17.5	3.8	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメの後ナデ 内面 LJ縫部ヨコナデ、縫部ナデ	やや粗 長石・石英・金雲母(0.1mm)	淡茶褐色	良好	
117	變	口縫部	15.3	3.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石・石英・雲母(0.1mm)	茶褐色	良好	
118	變	口縫部～ 体部	15.4	13.6	外面 縫部～体部ハケメ(13本/2.3cm) LJ縫部ヨコナデ、縫部上部板ナ デ、中段ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母(1mm)	暗茶褐色	良好	
119	變	口縫部	18.6	7.1	外面 口縫部ヨコナデ、縫部ハケメ後ナデ 内面 口縫部ヨコナデ、縫部ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・くさり砂	淡茶褐色	良好	

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎土	色調	焼成	備考
120	甕	口縁～ 体部	19.8	33.2	外面 調節ヨコナデ、体部ハケメ (1.5cm×2.5cm) 内面 顶部指痕底、下位ヘラケズリ	真 長石・石英・金雲母(1mm)	淡茶灰色	良好	
121	甕	頸部～ 体部	/	31.2	外面 口縁ヨコナデ、体部ハケメ(1.5cm) 内面 口縁ヨコナデ、頸部ハナナデ、多様指痕底	真 長石・石英・金雲母(1mm)	淡茶灰色	良好	
122	甕	口縁部	21.6	1.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗	暗茶褐色	良好	
123	甕	口縁部	18.8	3.2	外面 ハケメの後ヘラミガキ 内面 ハケナナデ	やや粗	淡茶色	良好	
124	甕	口縁部	10.1	3.1	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	粗 長石・角閃石・金雲母	淡茶褐色	良好	
125	高杯	杯部下位 ～柱状部 上位	/	4.1	外面 杯部ナナデ、柱状部ヘラナナデ 内面 杯部ナナデ	精良	橙色	良好	
126	高杯	脚部	12.0	5.6	外面 ヘラナナデ 内面 上位ヘラケズリ、下位指痕底	やや粗	橙色	良好	
127	高杯	柱状部	/	5.0	外面 上位ヘラナナデ、下位ヨコナデ 内面 上位ヘラナナデ、下位ヘラケズリ	やや粗 長石・石英・金雲母	暗茶褐色	良好	
128	高杯	杯部下位～柱 状部	/	5.7	外面 杯部柱状部(6本×1.2cm)、 柱部ヘラミガキ 内面 杯部ナナデ、柱状部ヘラケズリ	真 長石・石英・くさり織	淡橙色	良好	
129	高杯	裾部	9.5	3.3	外面 ナナデ 内面 ハケメ	やや粗 長石・雲母(0.1mm)	橙茶色	良好	
130	高杯	裾部	9.8	2.8	外面 ナナデ 内面 上位ヘラケズリ、下位指痕底	やや粗 長石(0.1mm)	淡茶灰色	良好	
131	高杯	裾部	11.7	1.8	外面 ヨコナデ 内面 ハケメ	精良	淡橙色	良好	
132	高杯	裾部	12.0	1.5	外面 ナナデ 内面 ハケメ	精良	乳灰色	良好	
133	高杯	杯部	11.4	3.0	外面 ハケメ 内面 ナナデ	精良	淡橙茶色	良好	
134	器台	脚部	12.3	3.6	外面 ナナデ 内面 ハケメ、指痕底	精良	橙色	良好	透孔

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎 土	色 調	焼成	備 考
135	瓶	頸部	/	5.1	外面 2本の凸縁の上下に波状文(17本) 内面 回転ナデ	精良	灰色	堅緻	須恵器
136	盃	口縁部	23.2	1.7	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
137	盃	口縁部	20.7	5.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	淡黄灰色	堅緻	陶質土器?
138	碗	口縁部 体部1/4	6.2	5.0	外面 口縁部回転ナデ、体部回転ケズリ、底部静止ヘラケズリ 内面 回転ナデ	精良	淡灰色	堅緻	須恵器
139	碗	体部1/2	10.2	7.9	外面 口縁部カキメ、体部上位波状文、下部ヘラケズリ 内面 回転ナデ	精良	淡灰色	堅緻	須恵器
140	器台	頸部	10.8	4.5	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	淡灰色	堅緻	須恵器
141	杯蓋	天井部	/	3.3	外面 後端より 1.4cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	良 石英・長石粒	暗灰色	良好	須恵器
142	杯身	天井部	/	3.3	外面 横端より 1.4cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	良 石英・長石	淡灰白色	堅緻	須恵器
143	杯蓋	1/2丸形	9.9	4.2	外面 受端端より 2.1cm以上回転ケズリ 内面 たちあがりナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
144	杯身	ほぼ完全 底部下位 なし	10.9	4.9	外面 受端端より 1.5cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
145	杯身	完型	10.1	4.0	外面 後端より 1.1cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
146	杯蓋	口縁部	12.9	3.4	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
147	杯身	1/2丸形	10.6	4.9	外面 受端端より 2.9cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	良 長石・石英粒 (0.4mm)	暗灰色	堅緻	須恵器
148	杯蓋	口縁部	13.2	3.6	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	精良	暗灰色	堅緻	須恵器
149	杯蓋	1/2丸形	12.3	3.6	外面 後端より 0.6cm以上回転ケズリ 内面 回転ナデ	良 長石(0.3mm)	淡灰色	堅緻	須恵器

番号	器種	部位	法量 径	cm 現高	調査の特徴	胎 土	色 調	焼成	備 考
150	杯蓋	天井部	/	2.5	外面 縦縫より2.3cm以上膨脹ケズリ 内面 回転ナデ	精良	淡灰白色	良好	須恵器
151	製塙 土器	口縁～ 体部	4.4	2.1	外面 指痕痕 内面 ヨコナデ	良 磨(1.5mm)	乳褐色	良好	
152	製塙 土器	口縁～ 体部	5.0	2.7	外面 刺落不明 内面 ナデ	精良	乳灰色	堅硬	
153	製塙 土器	口縁～ 体部	4.7	2.6	外面 粗いユビナデ 内面 ヨコナデ	精良	乳灰色	良好	
154	製塙 土器	口縁～ 体部	4.3	3.5	外面 ナデ 内面 ナデ	精良	淡灰褐色	良好	
155	製塙 土器	口縁～ 体部	4.0	2.2	外面 粗いユビナデ 内面 ヨコナデ	精良	淡黄灰色	良好	
156	製塙 土器	口縁～ 体部	5.0	5.6	外面 粗いユビナデ 内面 ヨコナデ	良 長石(0.4mm)	淡灰褐色	良好	
157	製塙 土器	口縁～ 体部	4.9	4.5	外面 縦方向粗いユビナデ 内面 ヨコナデ	精良	乳灰色	良好	
158	製塙 土器	口縁～ 体部	4.3	4.4	外面 タタキ 内面 ナデ	精良	灰白色	良好	
159	製塙 土器	口縁～ 体部	4.2	2.4	外面 未調整 内面 指痕痕	精良	暗灰色	良好	
160	製塙 土器	口縁～ 体部	3.9	4.3	外面 刺落不明 内面 ヨコナデ	良 石英・長石粒(0.3mm)	灰白褐色	良好	
161	製塙 土器	底部	/	1.1	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	精良	暗灰色	良好	
162	製塙 土器	底部	/	2.3	外面 刺落不明 内面 ナデ	良 長石・石英粒	外面 燐付層 内面 灰白色	良好	
163	不明	体部	/	/	外面 垂子タタキ 内面 ナデ	やや粗 長石・石英	淡黄灰色	良好	韓式土器
164	不明	体部	/	/	外面 垂子タタキ 内面 ナデ	やや粗 石英・長石	暗灰色	良好	韓式土器

番号	器種	部位	法量 径	cm 深高	調査の特徴	胎土	色調	焼成	備考
165	不明	体部	/	/	外面 條子タタキ 内面 ナデ	やや粗 長石・礫・石英	外面 塗付有 内面 淡黄灰色	良好	韓式土器
166	不明	体部	/	/	外面 條子タタキ 内面 ナデ	粗 金雲母・チャート 長石・石英	外面 塗付有 内面 淡黄灰色	良好	韓式土器
167	不明	体部	/	/	外面 條子タタキ 内面 ナデ	やや粗 石英・金雲母 長石	淡黄灰色	良好	韓式土器
168	不明	体部	/	/	外面 織塵文 内面 ナデ	良 長石・石英	暗灰灰色	堅硬	韓式土器 須恵器
169	不明	体部	/	/	外面 新格子タタキ 内面 イタナデ	良 石英(5mm)・長石	淡黄灰色	良好	S K-01 韓式土器
170	瓶	把手	/	/	外面 ユビナデ 内面 ユビナデ	良 石英・長石(5mm)	茶灰色	良好	韓式土器
171	瓶	口縁部	/	2.7	外面 新格子タタキ 内面 ヨコナデ	やや粗 雲母・礫 長石・石英	淡青灰色	良好	韓式土器

### 3. 東郷遺跡（90-550）の調査

調査地 本町1丁目91番地

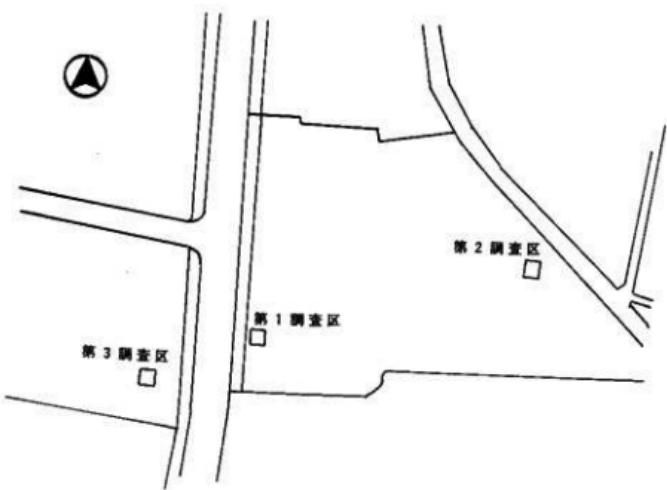
調査期間 平成3年3月18日

#### 1. 調査概要

本調査は市庁舎建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地は府道をはさんで西と東に分かれる。東側敷地の南西部部分（第1調査区）と東端部分（第2調査区）、及び西側敷地の南東部分（第3調査区）にそれぞれ4m四方の調査区を設定した。第1調査区では重機と人力を併用して地表下3.6m掘削したところ、地表下2.0m～2.6m、（TP 6.3m～6.9m）付近で土師器片を含む暗灰色粘土層を確認した。第2調査区では地表下3.3mまで掘削したところ、地表下2.6m以下、TP 6.3m以下で土師器を含む暗灰色粘土層とこれをきりこむ灰白色砂層を確認した。第3調査区では地表下3.36mまで掘削したところ、地表下1.7m～2.2m（TP 6.8m～7.3m）で中世の水田遺構を、地表下2.4m～3.2m、（TP 5.8m～6.4m）で布留式土器の破片を含む暗緑灰色粘土層を確認した。



第16図 調査地周辺図 (1/13000)



第17図 調査区設定図 (1/1400)

## 2.まとめ

本調査地では地表下2.5m以下で古墳時代の包含層を広範囲にわたって確認した。また、東端の第3調査区ではこの包含層をきりこむ自然流路の堆積も確認している。さらに西側の第3調査区では、地表下2.0m前後で中世の水田層かと思われる畦畔状の高まりを確認している。

周辺では古墳時代の方形周溝墓、集落などが検出されており、本調査地においてもこれらと密接な関係をもった遺構の存在する可能性が高い。  
(吉田)



第18図 基本層序模式図 (1 / 40)

## 4. 植松遺跡（90-433）の調査

調査地 植松町5丁目地内

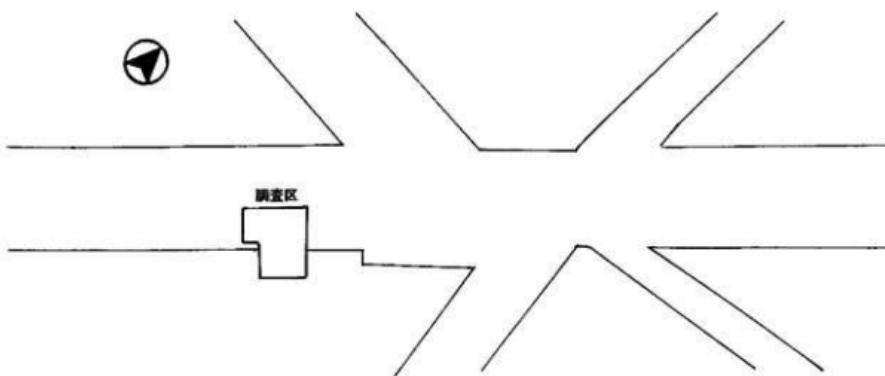
調査期間 平成3年5月22日～27日

### 1. 調査概要

本調査は下水道工事（発進立孔設置）に伴う遺構確認調査である。立孔部分の約60m<sup>2</sup>を対象とした。まず、工事の関係上、調査地の南側の4.8m×3mの部分を先に調査したのち、大半を占める北側部分の調査を行なった。地表下2.0m前後の盛土部分を重機で掘削したのち、以下、地表下2.5mまでを人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。この結果、地表下2.2m（TP 7.8m）の暗灰色有機物混粘土層、及び暗緑灰色シルト層上面で自然流路、土坑1基を検出した。自然流路は最大検出長5.8mを測り、最大幅3.9m、最大の深さ0.15mを有する。灰白色粗砂層を埋土とし、東端を中心に土師器片などが出土した。調査区を2分したため、肩を別々に検出することとなったが、同一の自然流路と捉えてよいものと思われる。土坑は調査区の南西部分で検出したもので、暗灰色粘土を埋土とし、土師器片などが出土した。また、調査区の東端、自然流路の北3m前後で自然流路の埋土のオーバーフロウとも考えられる状態で、灰白



第19図 調査地周辺図 (1/13000)



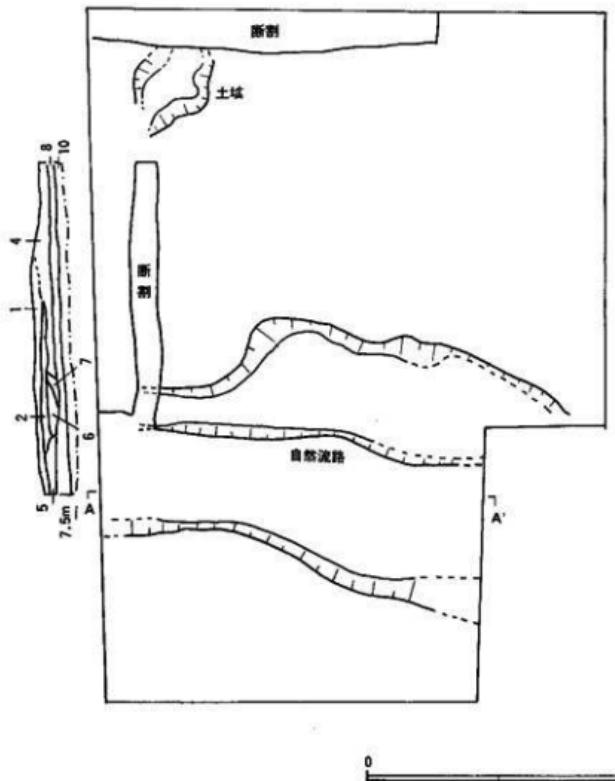
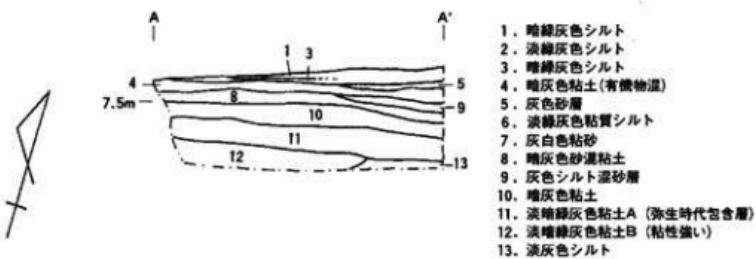
第20図 調査区設定図 (1/600)

粗砂層のたまる部分があり、ここで須恵器、土師器などが集中して出土した。また、南側の調査の終了した時点で地表下3.5mまで下層確認を行なったところ、TP 6.65m～7.3mで弥生時代中期の土器片を若干含む淡暗緑灰色粘土A層を確認した。

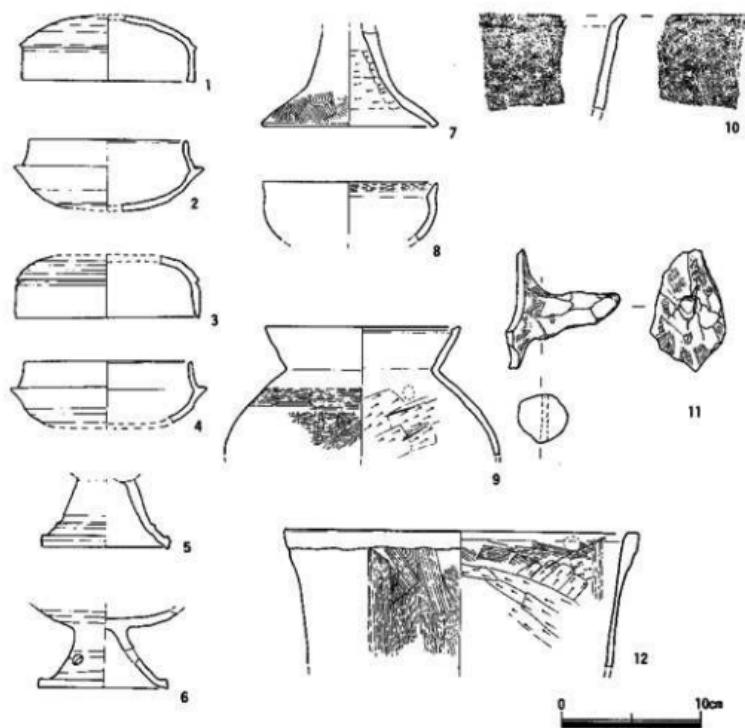
出土土器のはほとんどは調査区の東側から出土したもので、9のみが自然流路の東端から出土した。1、3は須恵器の杯蓋、2、4は須恵器の杯身、5、6は須恵器高杯の脚部、8は土師器の鉢、9は土師器の壺、10～12は土師器の瓶である。須恵器はMT15型式前後に位置付けられる。

## 2.まとめ

当調査地ではTP 7.8m前後で東西方向の自然流路を確認した。この自然流路は6世紀前半頃には埋まっていたものと思われる。周辺の調査では古墳時代後期の集落跡の一部なども検出されており、本調査の成果は集落の範囲等を考える上で重要である。 (吉田)



第21図 調査地平面及び土層断面図 (1/60)



第22図 出土遺物実測図 (1/4)

## 5. 中田遺跡 (91-141) の調査

調査地 八尾木北 6 丁目地内

調査期間 平成 3 年 9 月 9 ~ 11 日、11 月 16 日

### 1. 調査概要

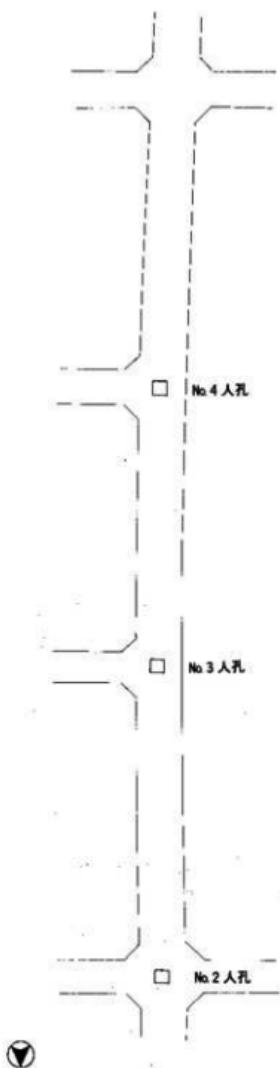
本調査は公共下水道工事に伴う遺構確認調査である。人孔部分 (2 m四方) 3ヶ所について遺構確認調査をおこない、これをつなぐ開削工事については立会調査を行なった。人孔は北から順に NO 2 人孔、NO 3 人孔、NO 4 人孔となる。NO 2 人孔では地表下 1.4m ~ 1.6m で古墳時代の土師器の壺片などを含む淡青灰緑色粘砂層、淡青灰色粘砂層、明淡青灰色粘質土層を確認した。これより下は灰白色粗砂層であり、若干、古墳時代の土器を含む。NO 3 人孔では地表下 1.6m ~ 1.8m で奈良時代から平安時代の土器を含む暗灰褐色小礫混粘砂を、この下の地表下 1.8m ~ 2.0m で古墳時代後期の土器片を含む暗灰色シルト層を確認した。この下にも灰白色粗砂層が堆積する。NO 4 人孔では地表下 1.6m 前後で水田になるかと思われる灰色砂泥粘土層、灰色粘土層を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。ここにおいても地表下 1.9m 以下は灰白色粗砂層の堆積であった。



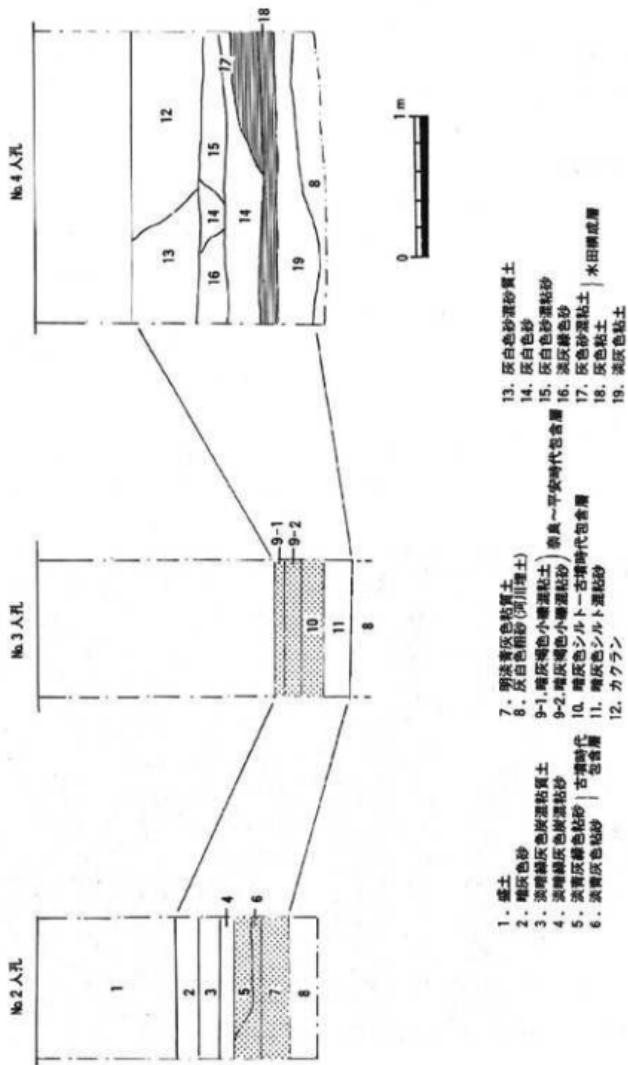
第23図 調査地周辺図 (1/13000)

## 2.まとめ

本調査地では北側を中心に古墳時代の包含層を確認した。立会調査でもこの包含層はNO 2人孔付近で最も密度が高いことが確認できた。南側にいくに従い盛土層が厚くなることもあり、包含層は顕著でなくなる。特にNO 4人孔付近ではまったく確認することができなかった。周辺の調査では同期の遺構・包含層が豊富に検出されているが、その面的なつながりは不明の部分が多く、本調査成果はそのつながりを明らかにする線の一つとなるであろう。(吉田)



第24図 調査区設定図 (1/1000)



第25図 基本層序模式図

## 6. 恩智遺跡 (91-232) の調査

調査地 恩智中町2丁目

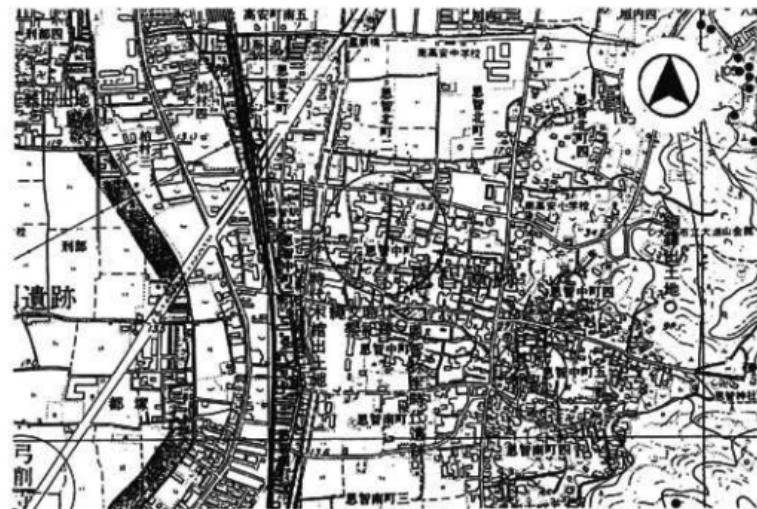
調査期間 平成3年9月30日、10月2、4日

### 1. 調査概要

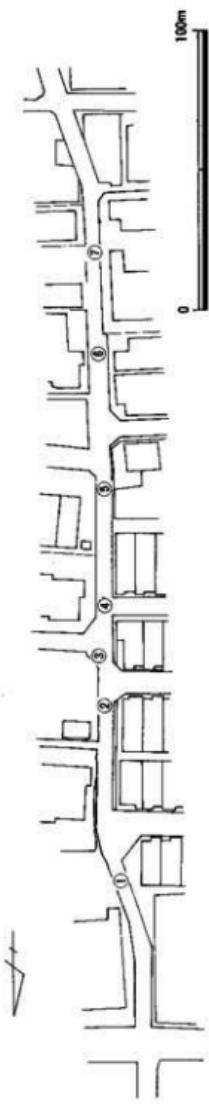
恩智遺跡は旧石器時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。なかでも弥生時代には中河内の中心的集落を形成していたと考えられ、その中心は現在の天王の杜付近一帯とみられる。遺物及び遺構は、弥生時代前期中・新段階から後期までみられるが中期の遺物が最も多量に出土しており、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式期に大きく発展を遂げたと思われる。

今回の調査は八尾市水道局による水道管埋設に伴う調査であり、天王の杜の北300mに位置しており、また、今年度の国庫補助事業による遺構確認調査(91-055)を実施した地点にも面している。

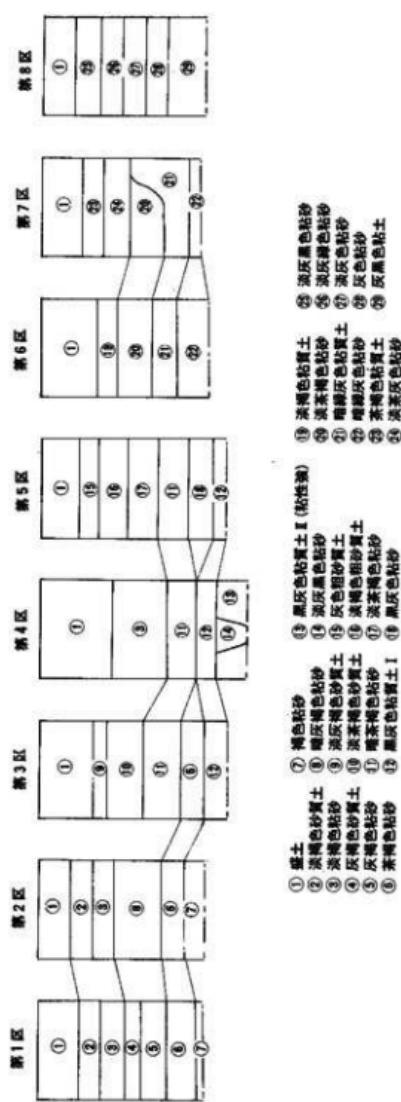
調査は約350mの工事区間のなかで21箇所の断面観察および遺物の採取を行ったが、そのうち8箇所の断面図を今回掲示しておきたい。そして、各々の断面図実測地点を第1区、2区と



第26図 調査地周辺図 (1/13000)



第27图 地点位置图 (1 / 1000)



第28图 基本顺序模式图 (1 / 40)

し、第8区まで設けた。なお、今回の調査では各々の調査地点ではレベルをとってはいないが北から南に向かうにつれて標高が高くなっている。

第1区—地表下0.9mの茶褐色粘砂層で土師器片を確認した。この第1区より北では擾乱層が厚かったが、南に行くにしたがって層全体の粘性は強くなり、茶褐色粘砂は浅いところでみられるようになる。

第2区—第1区で確認できた茶褐色粘砂層中より瓦器の小片が出土した。この層の下の褐色粘砂ではまだ弥生時代の遺物は包藏していない。

第3区—中世の包含層である茶褐色粘砂層中は、地表下約1mでみられるがその下部層では黒灰色粘質土Ⅰが確認できた。

第4区—茶褐色粘砂層はなくなつており、地表下約0.9mの黒灰色粘質土Ⅰからは弥生時代中期の遺物が出土している。また、地表下約1.26m黒灰色粘質土Ⅱ（粘性強）では径0.2m深さ0.24mのピットを1基検出している。埋土は淡灰黑色粘砂で、弥生土器片3点がピット内より出土している。第4区は国庫補助事業（91-055）で実施した調査地の西に面した道路上である。

第5区—地表下約1.05mの黒灰色粘砂及びその下部層の黒灰色粘質土Ⅰが弥生時代の遺物包含層である。今回の調査では第4区と第5区の間で最も多くの遺物が出土した。遺物はIV様式が中心、壺・高杯・壺に混じって石包丁・楔形石器などが出土している。

第6区—第4区、第5区で確認できた遺物包含層である黒灰色粘砂・黒灰色粘質土Ⅰはみられない。暗緑灰色粘砂層と暗緑灰色粘質土が地表下0.8mに堆積しているが、小片の遺物がみられる程度である。

第7区—暗緑灰色粘質土をベースとする落ち込み、あるいは溝の肩が断面で確認できた。埋土である淡茶褐色粘砂層中より土師器の小片がみられ、中近世の遺構であると思われる。

第8区—ここではまた地表下0.8mにある遺物包含層を確認できた。しかし、第4区、第5区でみられたような黒灰色粘砂・黒灰色粘質土Ⅰではなく、灰色粘砂および灰黒粘土層である。遺物量も第4区・第5区ほどではなかった。

### 3.まとめ

今回の調査は幅1m程の掘削の立会調査であったが、弥生時代の遺物包含層の遺存深度を確認することができた。また、この遺物包含層は中世の段階でかなりの削平を受けた箇所があることも併せて実見できた。そして、本調査では北側で包含層が確認できなかつたことから弥生時代中期の集落は第4区周辺が縁辺であることも考えられよう。

(道)

## 7. 教興寺跡 (91-326) の調査

調査地 教興寺 6丁目399番地先（寺池）

調査期間 平成3年10月18日

### 1. 調査概要

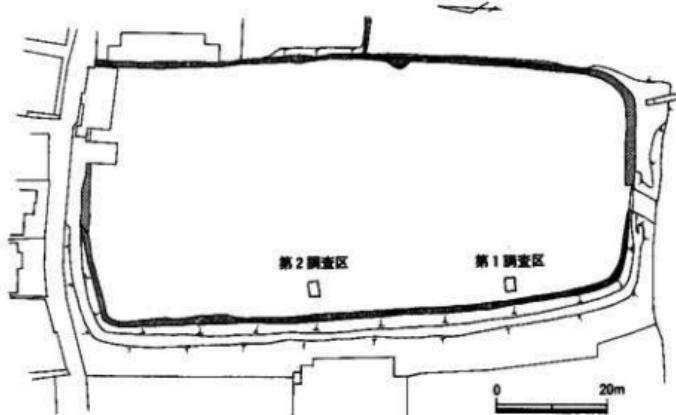
教興寺は蘇我氏と物部氏との戦の後、崇峻天皇元年に聖徳太子が秦河勝に命じて建立させ、仏教の興隆を願って教興寺と名付けたと伝えられるもので、古くから秦寺とも言われている。その後、鎌倉時代に荒廃していたものを西大寺の観音が再興したが、永禄5年（1562）に河内守護畠山高政と三好義興、松永久秀との教興寺合戦で戦火を被り灰塵と化した。そして江戸時代になって高野山の淨巖覚彦和尚によって復興された。現在は真言律宗西大寺末で、獅子吼山大慈三昧院教興寺と号し、高安寺または蔵寺と俗称されている。

以上のような歴史を持つ教興寺であるが、周辺で奈良-鎌倉時代の古瓦が出土、採取されている以外に考古学的調査はあまり行われてはいない。しかし、昭和57年に当教育委員会によって現教興寺の境内の一部を発掘調査を実施している。この時には江戸時代の瓦溜め、瓦列造構、



第29図 調査地周辺図 (1/13000)

室町時代の礎石と池状造構を検出したほか、教興寺合戦によると推定される焼土や古墳時代の遺物、平安～鎌倉時代の瓦等を確認したが創建期から奈良時代に関する遺構・遺物は見つからなかった。(註1)



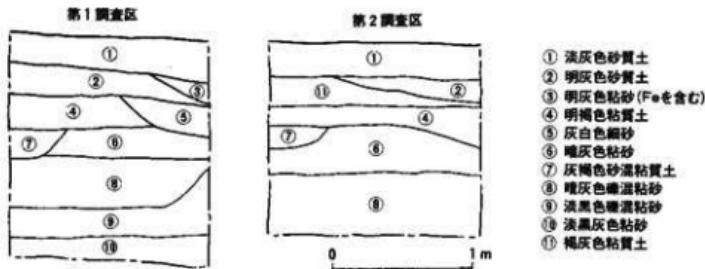
第30図 調査区設定図 (1/40)

今回調査したのは寺池とよばれる池の改修工事に伴って実施したもので、堤の近辺に1.5m×2mの調査区を2ヶ所設け、地表下1.4～1.7mまでを対象とした。池は既に溜まり水が抜かれており堤から4～5mまでは底部表面が露呈していた。この表面では平安時代～鎌倉時代と思われる平瓦や十六葉單弁蓮華文の軒丸瓦とともに須恵器、土師器片等が多く散乱していた。それ故に調査区とも第1層より遺物がみられる。

第1調査区は1.7mまで掘削、調査を行った。第1層の淡灰色砂質土は池の浸食によるものと思われる。地表下0.4mにある第2層褐色質土上面でピットが検出できた。ピットは、径0.3m、深さ0.15mを測る。またその第6層の暗灰色粘砂でもピットを検出した。以下暗灰色疊混粘砂、淡黒灰色疊混粘砂、淡黒灰色粘砂と堆積しているが、0.4mの厚さで堆積している暗灰色疊混粘砂では少量だが土師器・瓦器片がみられた。また、この暗灰色疊混粘砂は淡黒灰色疊混粘砂の落ち込みの埋土である。

第2調査区は地表下1.4mまで調査を行った。地表下0.4mの第11層褐色粘質土上面と第6層暗灰色粘砂上面でピットを検出した。この第6層は第1調査区で見られたものと同じ層である。

両調査区とも出土した遺物はその大半を瓦が占め、土器は殆ど出土しておらずピット等の時期を明確にすることはできなかった。



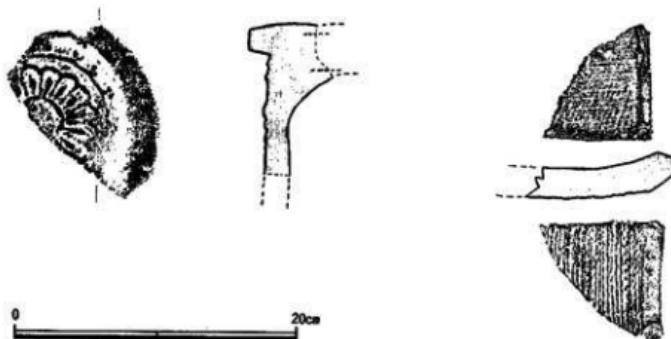
第31図 西壁土層断面図（1／40）

## 2. 出土遺物

遺物はコンテナに約2箱出土しているが、そのほとんどが瓦である。時期は平安時代前期から近世にいたる。平瓦が多く凹面に布目痕がみられる。1は表面採取によって得られた十六葉単弁蓮華文軒丸瓦である。外区内縁に小さめの珠文を配し、一線の界線を巡らせた内区の花弁は肉薄く、凸線によって表現されている。中房は周囲より一段高く立体感がある。瓦范は瓦当の周縁外側までかぶっており、周縁の立ち上がりはやや斜め気味になっている。胎土はやや粗で、1mm～2mmの礫を多く含む。色調は灰白色を呈している。2は須恵質の軒平瓦で、凸面に繩目の叩きを施し、凹面に目の細かい布目が残っている。端部は凹面・凸面ともにヘラケズリを用いて調整している。一枚作りである。

## 3.まとめ

本調査地は通称「寺池」と呼ばれている。また、付近の人の話では「金堂池」とも言い、も



第32図 出土遺物実測図（1／4）

とは教興寺の金堂があったとする言い伝えが残されている。このような寺に関係した池の名前は「重頭（塔）池」・「大門池」等があり、また周辺には「堂山」・「瓦田」・「寺北」・「堂ノ上」などの小字名がみられる。

これまで寺池はその成立時期について、創建期かあるいは鎌倉時代以降といわれていたが今回の調査では、第8層・9層より瓦が出土したことにより鎌倉時代以降に掘削され、池として形を成したと考えられる。また、八尾市史では教興寺の寺域の推定範囲を現教興寺の南西、大通寺の本堂を中心として東西南北1町半ないしは2町四方としており、寺池周辺はふくめていない（註2）が、本調査では多くの瓦が出土したことから、寺域は寺池を含めて現教興寺よりも東南にあったと考えたい。(道)

#### 参考文献

- (註1) 八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書－教興寺の調査－』1983  
(註2) 八尾市史編纂委員会『八尾市史（前近代）本文編』昭和63年

## 8. 中田遺跡 (91-293) の調査

調査地 中田3丁目地内

調査期間 平成3年10月14日、15日、29日

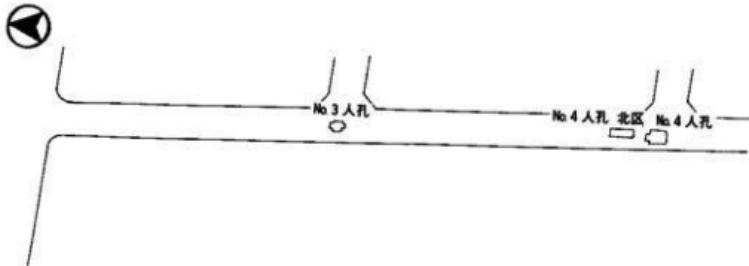
### 1. 調査概要

本調査は公共下水道工事に伴う遺構確認調査である。調査は交差点部分の人孔を対象とした。10月14日には北側のNO3人孔部分の調査を行い、10月15日にはNO4人孔部分の調査を行なった。また、10月29日に行なったNO4人孔のすぐ北側での開削工事の立会の際、断面に土器の露出がみられたため、急速、断面の実測及び遺物のとりあげ等を行なった。これをNO4北区の調査とする。また、NO4人孔の設置で南側を若干拡張した際、埴輪が出土した。

(NO3人孔部分の調査) 東西3.5m、南北2.4mの十字形の部分を地表下約2.3mまで掘削した。この結果TP9.2m以下の灰褐色粘砂層、暗灰褐色粘砂層、暗淡褐灰色粘質土層、灰褐色砂質土層のそれぞれの上面での溝、小穴などの遺構を検出した。上記の2層は中世の包含層で若干古墳時代の土器が含まれていた。3層目の暗淡褐灰色粘質土層は古墳時代の包含層で弥生土器も若干含まれている。TP8.7m以下の灰褐色砂質土層以下は遺物を確認することはでき



第33図 調査地周辺図 (1/13000)



第34図 調査区設定図 (1/1200)

なかった。TP 8.4m 以下は灰白色の砂礫層がつづく。中世の遺構、包含層から出土したのは、瓦器、土師器、須恵器などで、12世紀～13世紀頃の所産である。

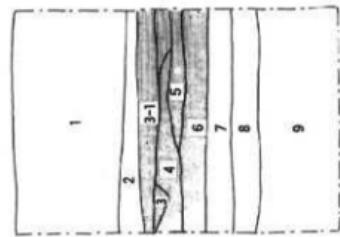
(NO 4人孔部分の調査) 東西2.4m、南北2.8mの凸形の部分を地表下2.2mまで掘削した。この結果、TP 9.26m 以下の明茶灰色粘砂層、茶灰色粘質土層、茶灰色粘砂層、茶灰色砂質土層のそれぞれの上面で溝、小穴、井戸などの遺構を検出した。特に第1面の明茶灰色粘砂層上面では径0.6m以上、深さ0.8mの素掘り井戸状の遺構を確認した。黄色粘土混じりの茶灰色粘質土、同砂質土層等を埋土とし、5層に分かれる。2層～4層を中心に土師器の壺と思われる破片が入っていた。この井戸状遺構の底面は溝水層である、淡茶灰色シルト層に達している。

明茶灰色粘砂層、茶灰色粘質土層には瓦器、土師器などが含まれていた。これらは12世紀から13世紀頃に位置付けられるものである。茶灰色粘砂層、茶灰色砂質土層は須恵器、土師器などに混じり、弥生時代後期の土器が若干含まれていた。TP 8.6m 以下の淡茶灰色シルト層、茶灰白色砂層では遺物を確認することはできなかった。

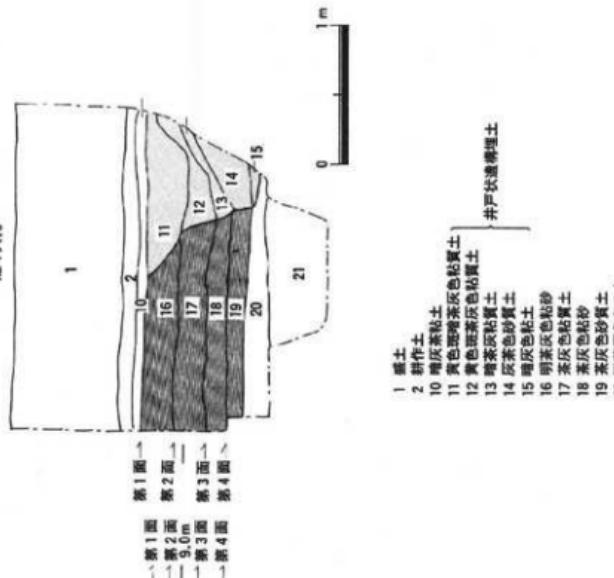
#### (NO 4人孔北区の調査)

断面精査を行なったのは東と西の断面でその南端はNO 4人孔の北3.85mの所になる。ここではこの南端を基点とする。西壁の基点から北へ約4～5mの位置で完形に近い弥生時代後期の土器が断面にかかっているのを確認した。これらの土器は地表下1.2m～1.4m、TP 8.7m～9.0mの灰褐色粘砂層で、下の層の淡茶色粘質土層上面にのるような状態であった。土器は何ヶ所か集中している所があり、南から順にA地点、B地点、C地点としてとりあげを行なった。A地点では完形の小型の壺が横転した状態で出土した。B地点では壺を中心とし奥の方では高杯、瓶の完形に近いものも出土した。C地点では壺片が奥の方では高杯、鉢の完形に近いものが出土した。この灰褐色粘砂層のきりこみであるが、西壁の北側は既に板がうちこまれていることもあり、判然としなかった。しかし、東壁では基点から4.6mのところで茶灰色砂質土からのきりこみがみられる。また、西壁では灰褐色粘砂層を基点部分から2.6mのところで確認することができず、基点から2.6m～3.0mのところに南側のきりこみのある可能性が高

No.3人孔

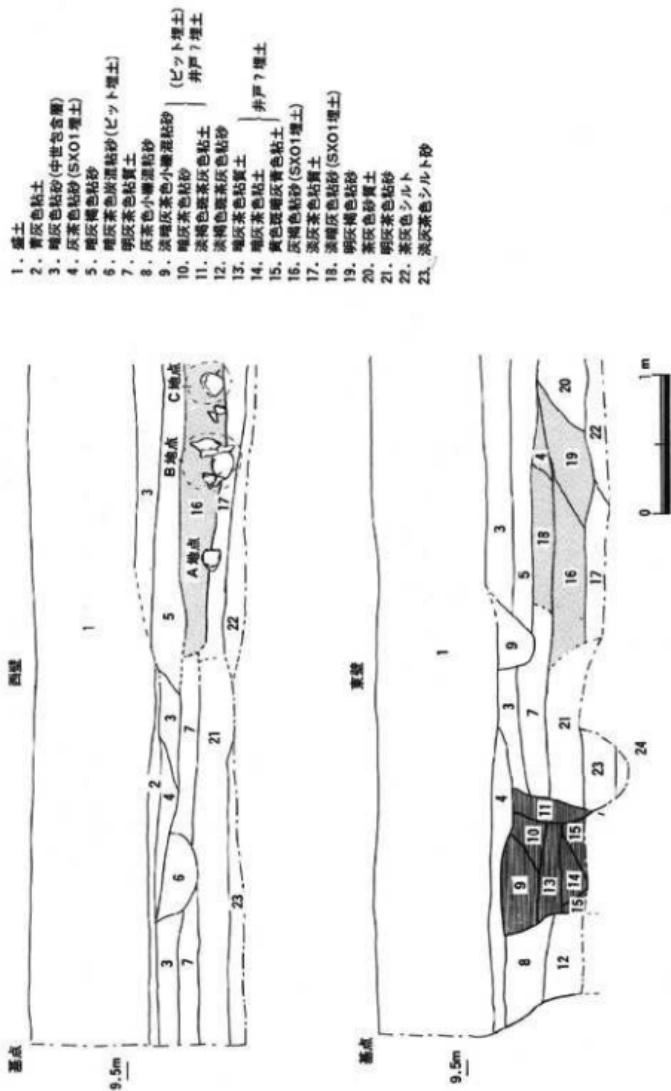


No.4人孔



第35図 NO.3・NO.4人孔土壤断面図 (1/40)

第36図 NO.4 人孔北区土質断面図 (1/40)



い。このようなことから南北1.7m~2.0m、深さ0.3~0.4mの遺構となる可能性があるが、その性格は不明であり、ここではSX01と仮称した。SX01の埋土と思われる層は西壁では灰褐色粘砂層の単層で、これより1.35m前後離れた東壁では灰褐色粘砂層の上に淡暗灰色粘砂層が堆積している。これをSX01の埋土とすると東壁では埋土が若干厚くなっていることになる。また西壁では南にいくに従いこの層は薄くなっている。

NO4人孔北区の南側では調査の制約上、平面調査は行なえなかつたが、断面で中世の井戸状遺構、ピット等を確認した。これらは地表下0.8~0.9m、TP9.3m前後の中世の包含層である暗灰色粘土層上面で確認した。井戸状遺構は東壁の南端部分で確認したもので掘り方の南北径1.7m、深さ0.6m以上を測り、灰茶色粘砂層を埋土とする。井戸の本体部分は南北径0.86mを測り、埋土は暗灰茶色粘質土、同粘砂層が中心である。掘削部分底面に杭が残るが、詳細な構造は不明である。ここからは瓦器、土師器などが出土している。13世紀前後の所産であろう。ピットも同時期のものと思われる。

#### (出土遺物)

第36図はSX01から出土した遺物である。ここでは詳細は観察表に譲る。1はA地点から、3~10はB地点から、2、11~15はC地点から出土した遺物である。3は小片のためはっきりしないが、口縁端部に刺突文を施す壺となるようである。4の瓶は体部上半は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のヘラミガキを行なう。体部下半にはヘラミガキの前に斜め方向の板状の圧痕がみられ、タタキを行なっている可能性がある。内面はハケ調整を行なうが、口縁部近くは、ヘラケズリ状の砂粒の動きがみられる。13の高杯の脚径は口縁径×0.7で復元している。15は内外面ヘラミガキを行なう鉢であるが、口縁端近くで明瞭な粘土紐の継ぎ足し部分がみられる。

これらの土器は遺構の性格が判然とはしないものの、その出土状況から一括資料として認定してよいものではないかと思われる。SX01出土土器の編年的位置付けであるが、詳細はここでは置き、注意される点のみ記す。壺では7は体部が膨らみ、球形に近い。また5、6、7、12は口縁がくの字状に屈折する。また6のタタキは細筋である。このような壺の形態に注目すれば、畿内第V様式の新しい段階、河内の土器編年で北島池式の様相と近いものと思われる。

#### (NO4人孔南出土の埴輪)

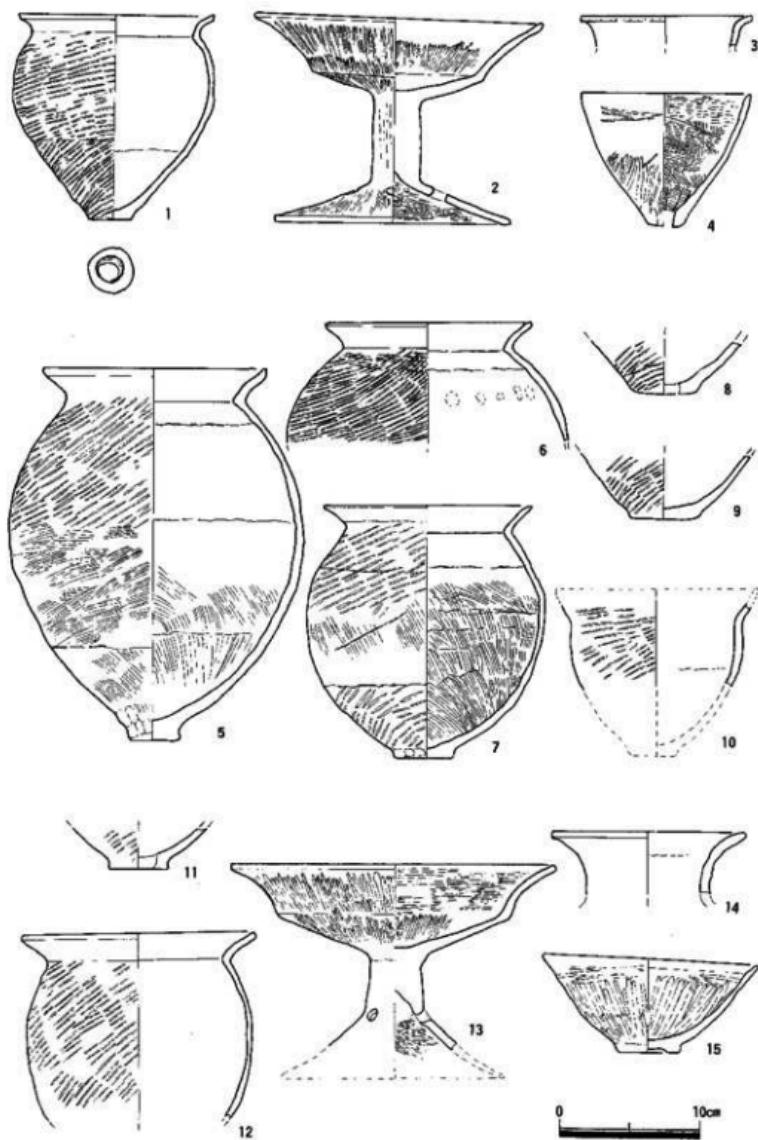
これらの埴輪の出土層位は全く不明である。色調、タガの形態からA~Dの4つに分類したが、同一個体での焼成の違いなどを考えると、単純に4個体の埴輪の存在を考えることはできない。A類は4点あり、色調は淡橙色、タガはしっかりした台形である。B類は1点のみで色調は淡橙乳色、タガは幅がやや広く、断面長方形である。C類は3点あり、色調は淡橙乳色~乳白色、タガは断面台形である。D類は底部から1段目の破片であり、色調は淡橙茶褐色、タ

ガは断面台形である。これらの外面調整はタガから第1段目はタテハケであるが、これより上は断続的なヨコハケを行なう。川西編年の第Ⅱ期に位置付けられ、4世紀末から5世紀初頭頃の所産と思われる。

## 2. まとめ

本調査では弥生時代から中世にいたる遺構、包含層を確認した。特に弥生時代後期においてはS X01のあり方からもわかるように、集落の中心部にあたっていたものと思われる。また、中世においても少くとも3つの遺構面を確認しており、安定した環境のもとで集落が広がっていたものと思われる。NO 4人孔の南側で出土した埴輪はどのような遺構にともなうものか全く不明であるが、埴輪棺などの存在した可能性も考えられる。

(吉田)



第37図 S X01出土遺物実測図 (1/4)



A-1



A-2



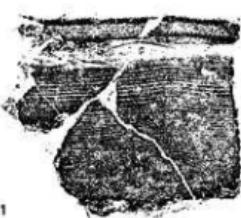
A-3



A-4



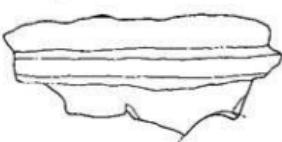
C-1



C-3



B-1



D-1



0 10cm

第38圖 NO.4人孔南出土填輪實測圖(1/4)

## NO 4 人孔北区 S X01出土遺物調査表

番号	器種	部 位	法量(単位:mm)		形態・調整の特徴	色 調	施 成	胎 土	残存率	備考
			径	現高						
1	壺	ほぼ完 形	14.0	14.8	①体部最大径は中位より上にある。口縁部は屈折して外反する。体部は神の実形を呈する。②外圍はタキ、内面は不定方向のナデを行う。	暗赤褐色	硬	普通	1/1 (口径)	外面 スス 付着
2	高杯	ほぼ完 形	20.6	14.7	①口縁部より杯高に対する割合は7/10。口縁部はゆるやかに外反し、脚柱部は垂直にのび、瓶部は直線的に聞く。②杯部内外面ハラミガキ、瓶部内外面ハケメ。	淡乳茶色	硬	やや粗	1/1 (口径)	透孔 4つ
3	壺	口縁一 頭形	12.2	2.2	①口縁は如意形に屈曲する。口縁部外面に刻文を施す。②内外面ナデ。	橙茶褐色	硬	やや粗	1/6 (口径)	
4	瓶	完形	12.0	9.7	①体部から口縁へは若干内凹しつつ外上方へのびる。口縁部は丸く収める。②外側は上半部ヨコヘラミガキ、下半はタキのちタテヘラミガキ、内面はナメ方向のハケメのち口縁部近くでヨコ方向ヘラケズリを行う。	棕茶色	硬	粗	ほぼ1/1 (口縫)	黒斑 あり
5	壺	ほぼ完 形	16.0	26.8	①体部中位よりやや上に最大径がある。やや長脚の体形になる。口縁部はくの字形に屈折し、口縁部はこころもち上方にたちあがる。②外側上半タキ、下半ハケメ、内面はハケメを行う。	暗茶褐色	硬	やや粗	1/2 (口径)	
6	壺	体部上 半	14.6	8.6	①口縁部はくの字形に屈折する。肩部はやや張る。②外側はタキ、内面はユビオサエ、ナデを行う。	淡棕赤色	非常に 硬	やや粗	1/2 (口径)	
7	壺	完形	14.9	18.2	①中位よりやや上に最大径がある。球形に近い腹部をもつ。口縁部はくの字形に屈折する。②外側はタキ、内面はハケメのちナデを行う。	明茶褐色	硬	粗	1/1 (口径)	
8	壺	底部	4.6	3.9	③外側はタキ、内面はナデを行う。	棕茶色	硬	やや粗		
9	壺	底部	4.6	4.7	④外側はタキ、内面はナデ及びユビオサエを行う。	暗茶褐色-棕 基色	やや軟	やや粗	1/1 (底径)	スス 付着
10	壺	頭一 体部		6.0	⑤外側はタキ、内面はナデを行う。	暗棕茶色	絶	やや粗		
11	壺	底部	4.1	3.0	⑥外側はタキ、内面はナデを行う。	淡乳黄色	軟	やや粗		
12	壺	体部上 半	16.8	8.4	⑦口縁部はくの字形に屈折し、体部へゆるやかに移行する。⑧外側はタキ、内面はナデを行う。	淡乳褐黃色	軟	やや粗		黒斑 あり 焼成 大
13	高杯	ほぼ完 形	23.0	15.5 (推定)	⑨口縁部より杯高に対する割合は1/2大。口縁部はゆるやかに外反し、短い脚柱部からゆるやかに瓶部が聞く。⑩瓶部内面はハケメ、その他のハラミガキ。	明褐色	非常に 硬	やや粗		透孔 4つ
14	長頸 壺	口縁	13.7	4.5	⑪瓶部から口縁部へゆるやかに外反する。⑫内外面ナデを行う。	棕茶褐色	やや硬	やや粗	1/4 (口径)	
15	瓶	ほぼ完 形	15.35	6.7	⑬輪台状の底部から体部はやや内凹して外上方へのびる。口縁部はやや外へ張りだす。口縁部近くはヨコヘラミガキ、その他のタテヘラミガキ。	赤褐色	硬	やや粗	ほぼ 1/1 (口径)	黒斑 あり

## N O 4 人孔南出土遺物觀察表

番号	器種	部 位	法量(単位cm) 径 現高	形態・調整の特徴		色 調	焼 成	胎 土	残存率	備考
				径	現高					
A 1			9.4	①タガは断面台形状を呈する。②外側は下段はタテハケ、上段はヨコハケ。内側はユビオサエおよびユビナデ。		淡褐色	硬(内部焼成不良)	粗		
A 2			11.6	①タガは断面台形状を呈する。②外側は下段はタテハケで、上段は断続的なヨコハケ。内側はユビオサエおよびユビナデ。		淡褐色	硬(内部焼成不良)	やや粗		
A 3			13.1	①タガは断面台形状を呈する。②外側は下段はタテハケで、上段は断続的なヨコハケ。内側はユビオサエおよびユビナデ。		淡褐色	硬(内部焼成不良)	粗		
A 4	底部		7.0	②外側はタテハケ。内側はユビナデ及びユビオサエ。		淡褐色	硬(内部焼成不良)	やや粗		
B 1			11.7	①タガの巾はやや広く断面長方形を呈する。②外側は断続的なヨコハケ、内側はユビオサエ及びユビナデ。		淡褐色乳色	やや硬	やや粗		
C 1			13.6	①タガは断面台形状を呈する。②外側は断続的ヨコハケ。内側はユビナデ。		乳白色	やや硬	やや粗		
C 2			8.3	①タガは断面台形状を呈する。スカシのある破片。②外側はタテハケ、内側はユビナデ、ユビオサエを行う。		淡白色	やや硬	やや粗		
C 3			8.2	①タガは断面台形状を呈する。②外側は断続的なヨコハケ、内側はユビナデ及びユビオサエ。		淡白色	普通	やや粗		
D 1	底部		17.8	①突出した断面台形のタガをもつ。②外側第1段はタテハケ、第2段は断続的なヨコハケ。内側はユビナデ及びユビオサエ。底端部外側はユビオサエ。		淡褐色茶褐色	良好	やや粗		

## 9. 恩智遺跡 (91-363) の調査

調査地 恩智中町2丁目

調査期間 平成3年10月30日

### 1. 調査概要

恩智遺跡は、生駒山地の西麓に拡がっており、旧石器時代から中世までの遺物が出土する複合遺跡である。遺跡は「天王の社」周辺から恩智川の西あたりにかけて拡がっている。

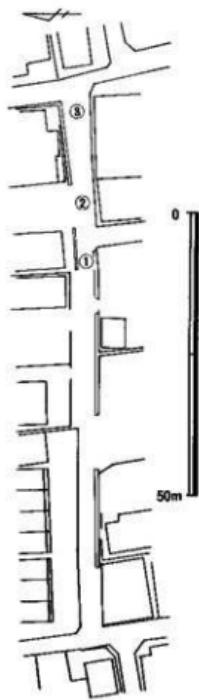
本調査は水道管理設に伴うもので、先に調査した(91-232)に引き続いて行ったものである。調査は91-232で調査した南北方向の市道に直行する東西方向の市道を対象とし、上幅約0.6m、下幅0.4m、地表下1.2mの掘削に際し、断面観察を中心として実施したものである。なお、南北方向の市道と東西方向の市道が直行する地点は第27図の第5区と第6区との間である。

担当者が現地へ赴いた時点では工程の約2/3が終了しており、まだ掘削していなかった残り、約15mから20mのみの調査となつた。

第1区 - 地表下0.97mの④暗青灰色疊混粘質土Iとその下部層の⑤暗青灰色疊混粘質II(粘性強)では弥生土器片に混じって瓦器の破片等も含まれている。



第39図 調査地周辺図 (1/13000)



第40図 調査位置図 (1/1000)

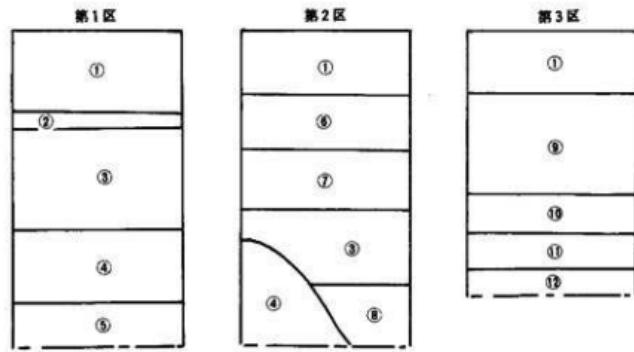
第2区—ここでは④暗青灰色砂混粘質土Iが落ち込んでいるのが確認でき、⑧暗茶褐色粘砂が入ってきていている。この層中からも土師器、瓦器等が出土している。

第3区—地表下0.85mの⑫暗灰色礫混粘質土は弥生土器片のみが出土しており、弥生時代の単純包含層と思われる。しかし、その上部層である⑪茶褐色砂質土では瓦器片がみられることから中世以降にかなりの削平を受けている可能性が高い。

## 2.まとめ

今回の調査地は91-232で行った地点よりも山手に位置し、標高にして1.2m~1.5m前後くなっている。そのためか明確な弥生時代包含層はなかった。ただ土層断面で見るかぎり、中世以降、周辺域では耕作地として用いられていたと思われ、包含層の大部分が削平されたと考えられる。  
(道)

①盛土、②淡褐色粘砂、③淡黄褐色砂質土、④暗青灰色砂混粘質土I、⑤暗青灰色礫混粘質土II(粘性強)、⑥褐色砂質土、⑦暗灰褐色粘砂、⑧暗茶褐色粘砂、⑨暗褐色砂質土、⑩淡褐色砂質土、⑪茶褐色砂質土、⑫暗灰色礫混粘質土



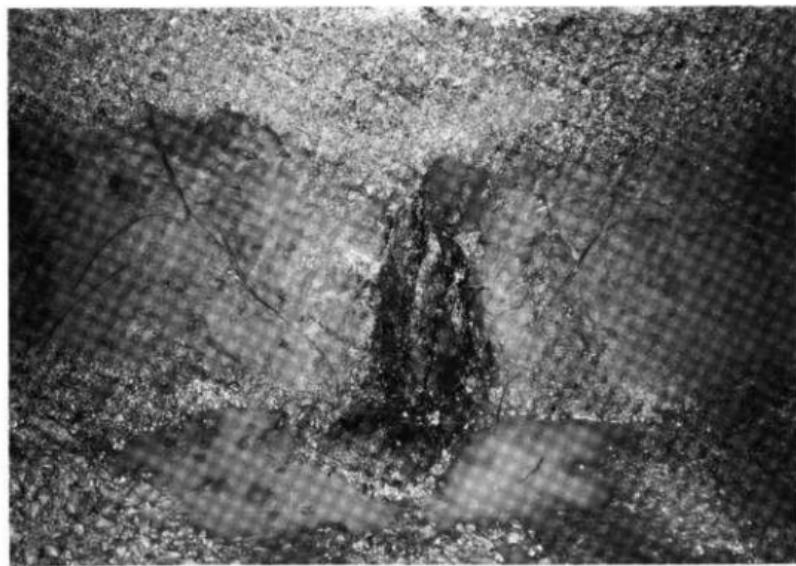
第41図 基本層序模式図 (1/20)

# 図 版

図版 1 木の本遺跡（90—176）



SP-01・SP-02

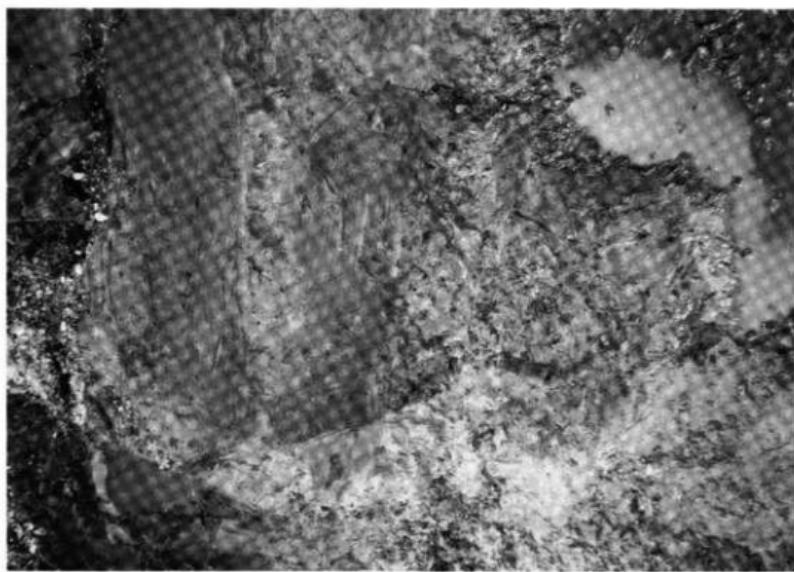


SP-03

図版2 木の本遺跡（90—176）



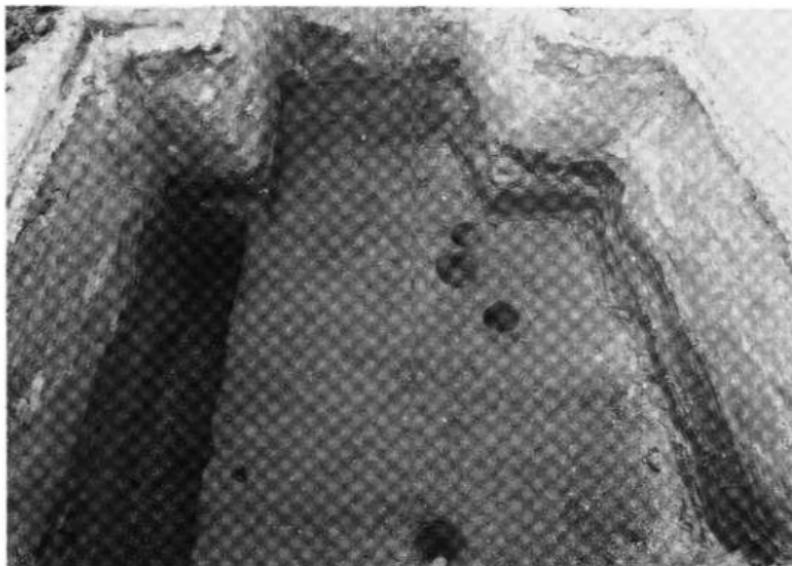
S P -04



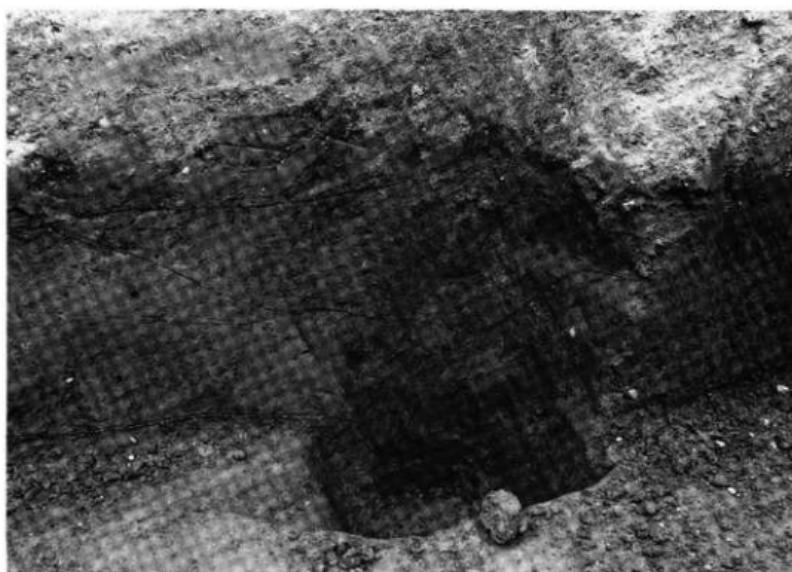
S X -01

圖版 3

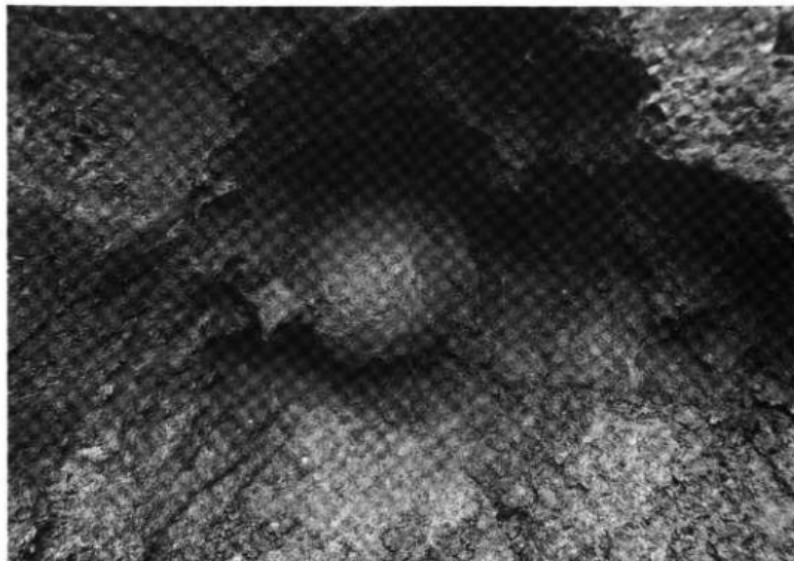
中田遺跡 (91—293)



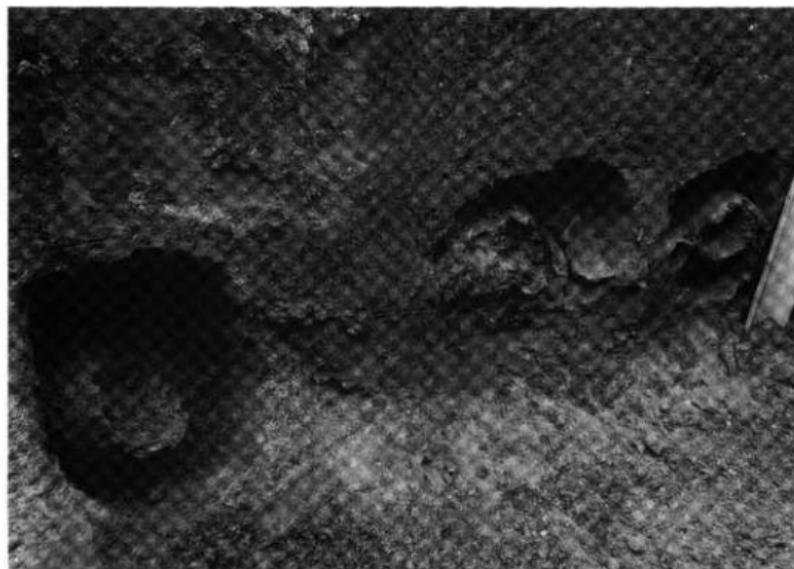
NO 4 人孔全景



NO 4 人孔 SEOI

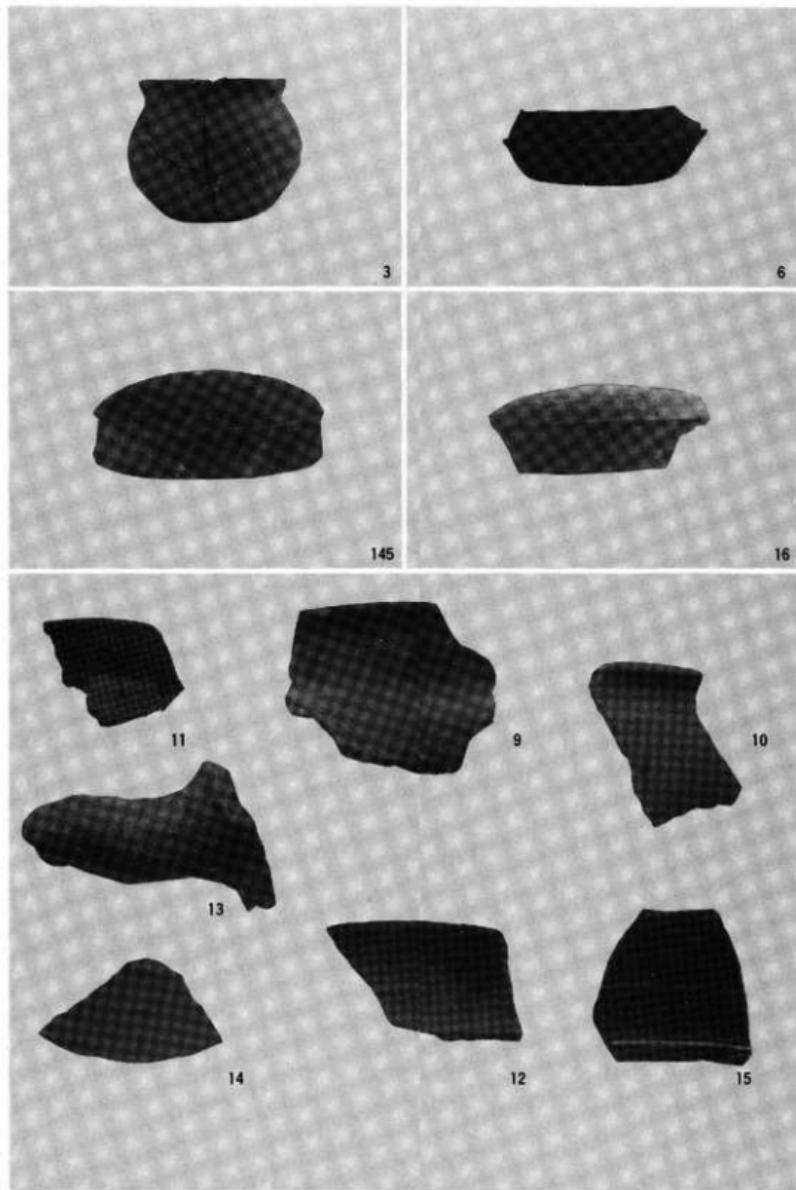


N O 4 北調査区土器出土状況A地点



N O 4 北調査区土器出土状況B・C地点

図版5 木の本遺跡(90—176)





23



26



21



27



17



19



22



18



20

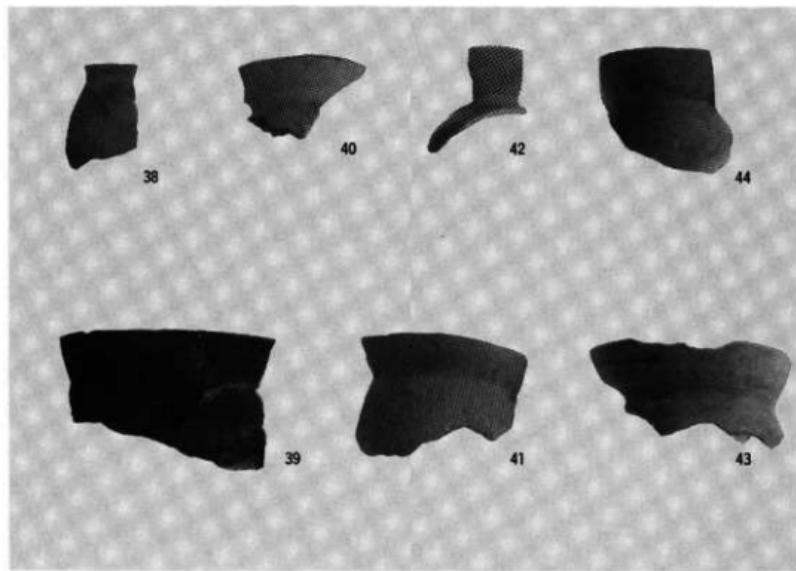
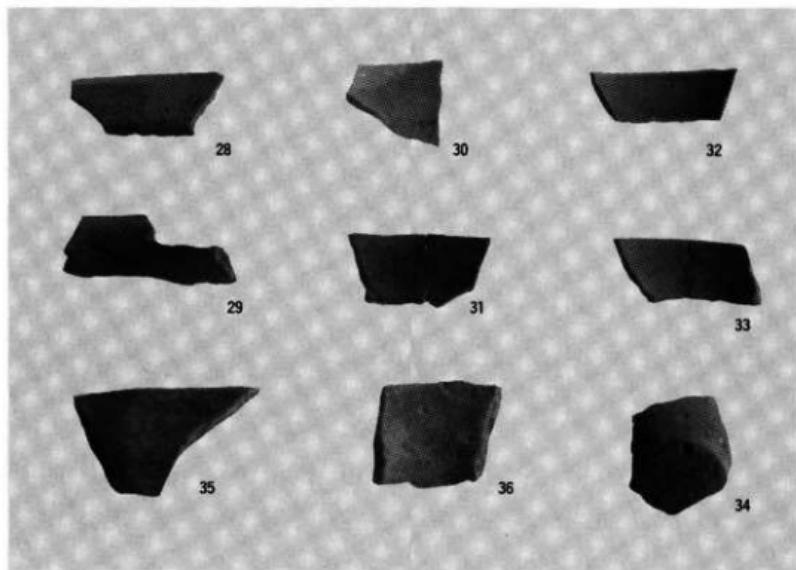


24

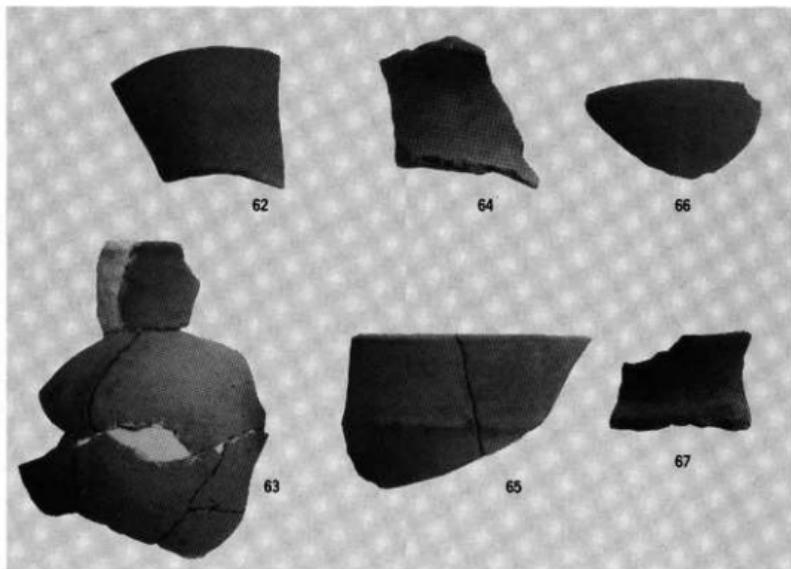
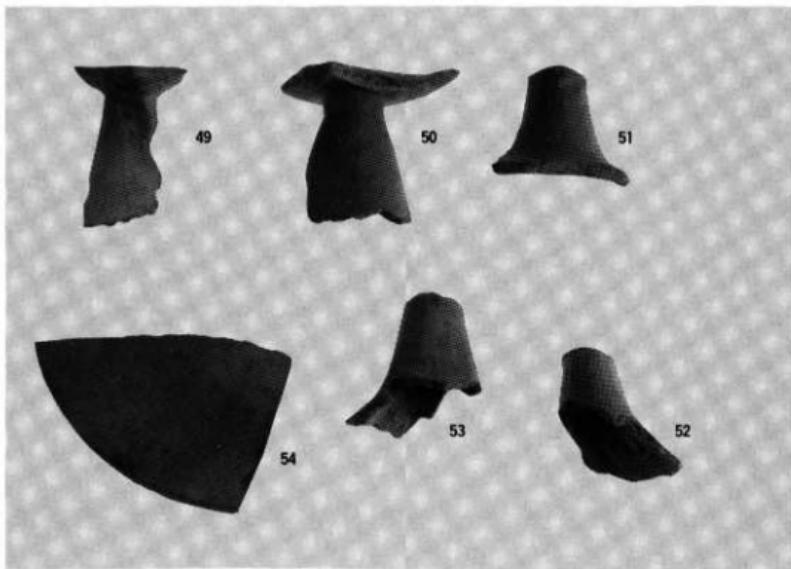


25

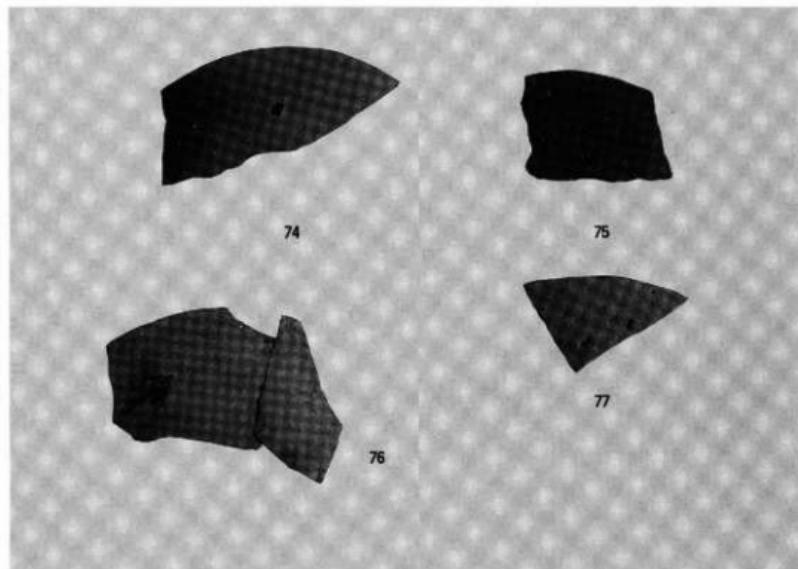
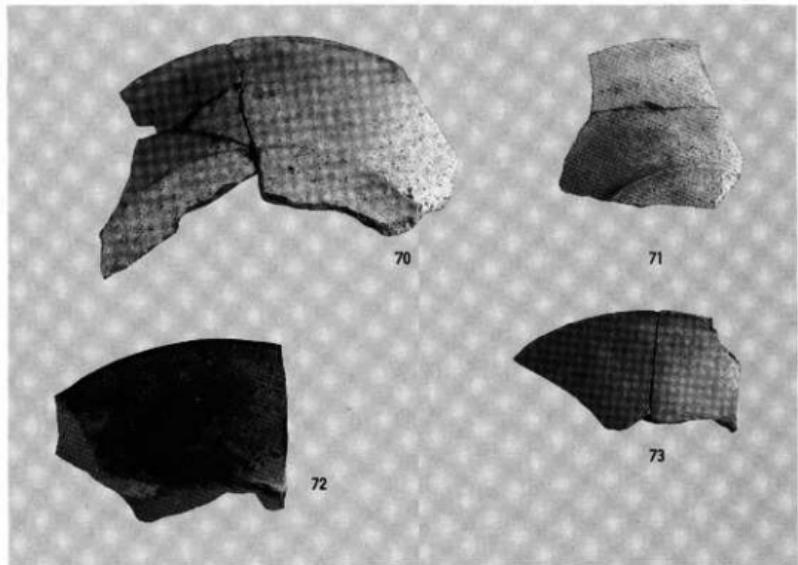
図版7 木の本遺跡（90—176）

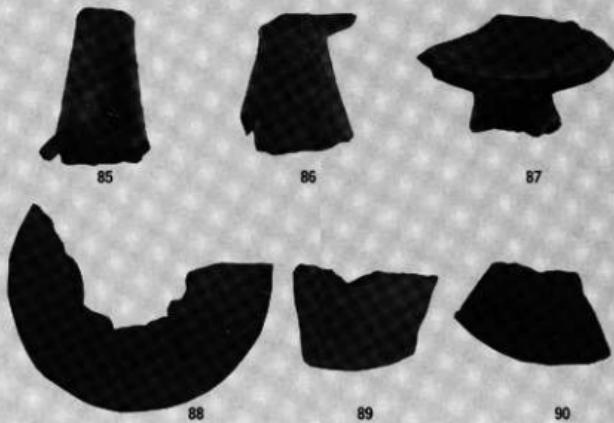
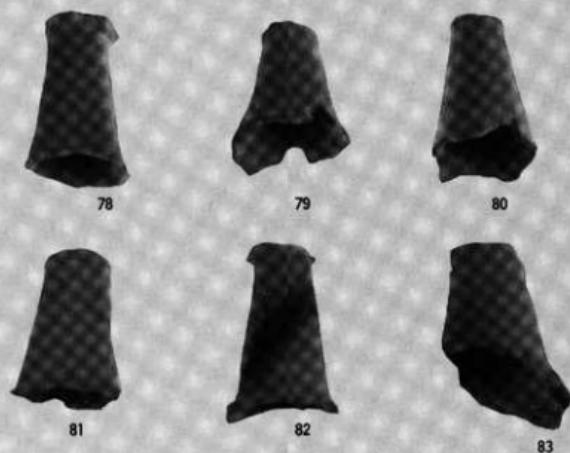


図版 8 木の本遺跡（90—176）



図版9 木の本遺跡（90—16）







68



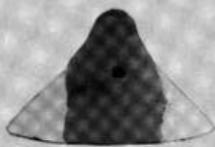
45



97



84



91



92



56



93



55



57



96



58



95



101



126



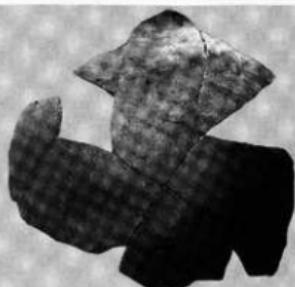
109



118



120



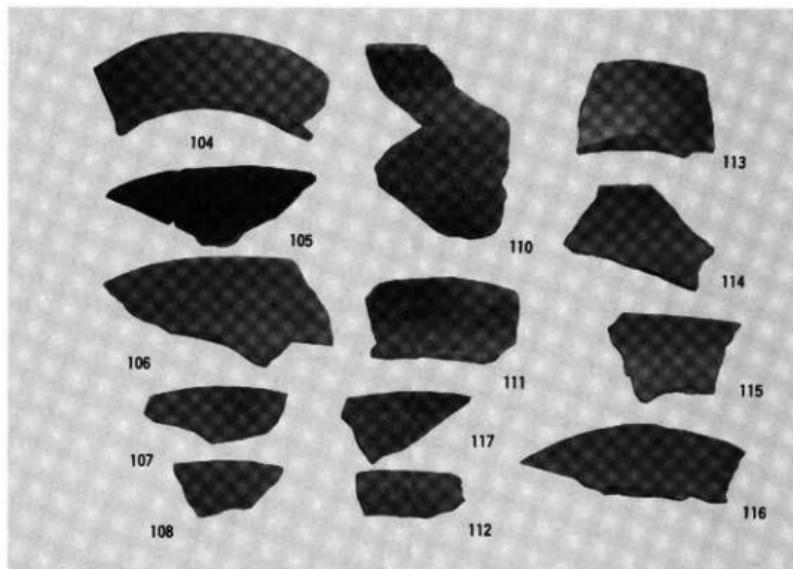
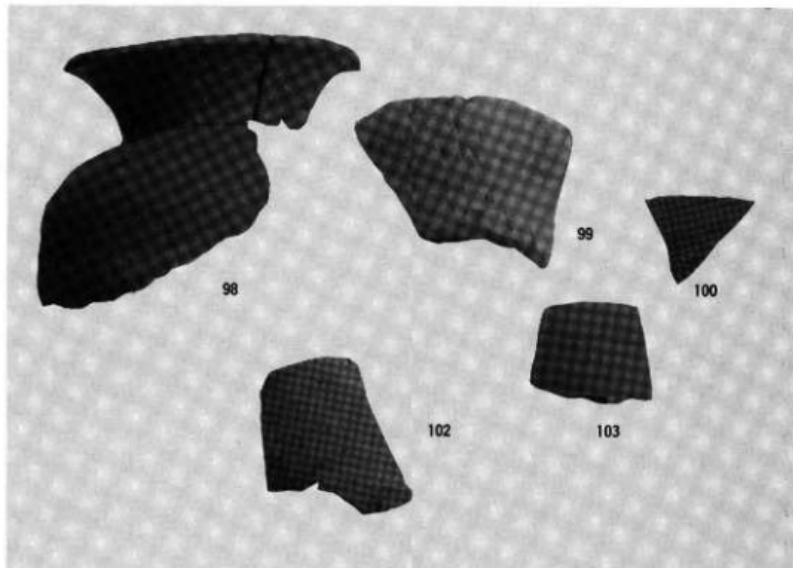
121

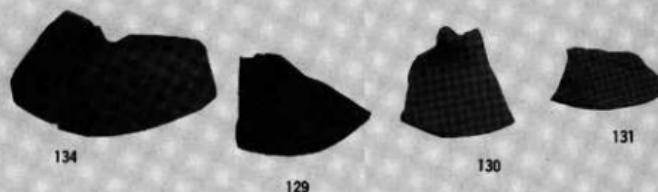


SP-03  
硬板



SP-03  
柱模





139



138



143



147



135



136



140



137



141



148



142



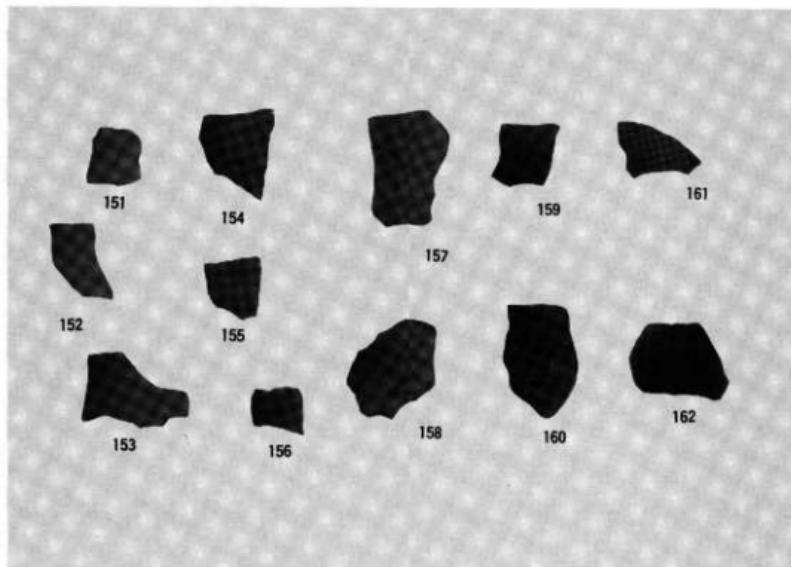
146



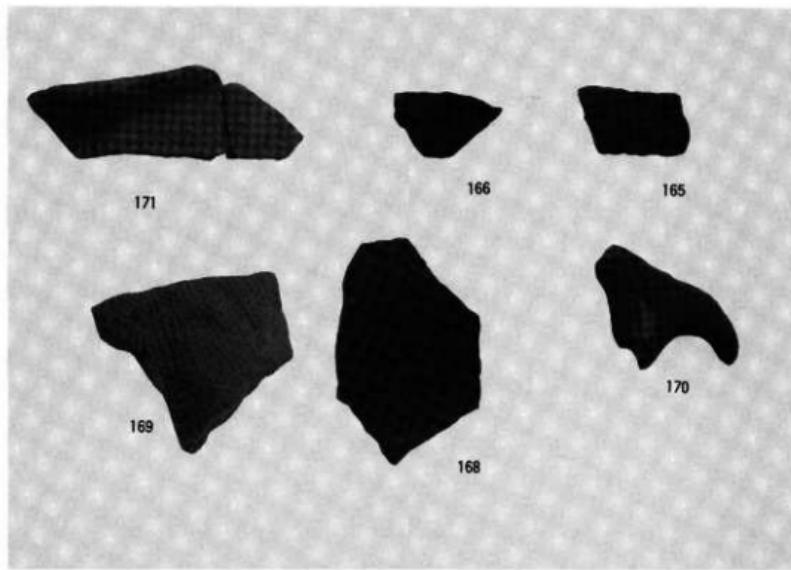
144



150



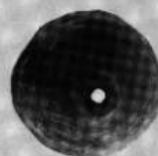
製塙土器



韓式土器



4 立面



4 (下から)



1



2



13



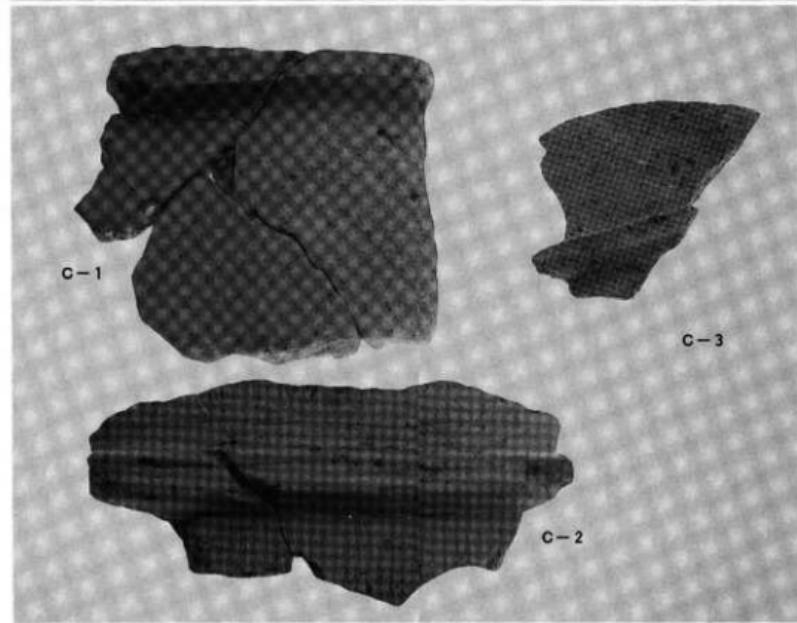
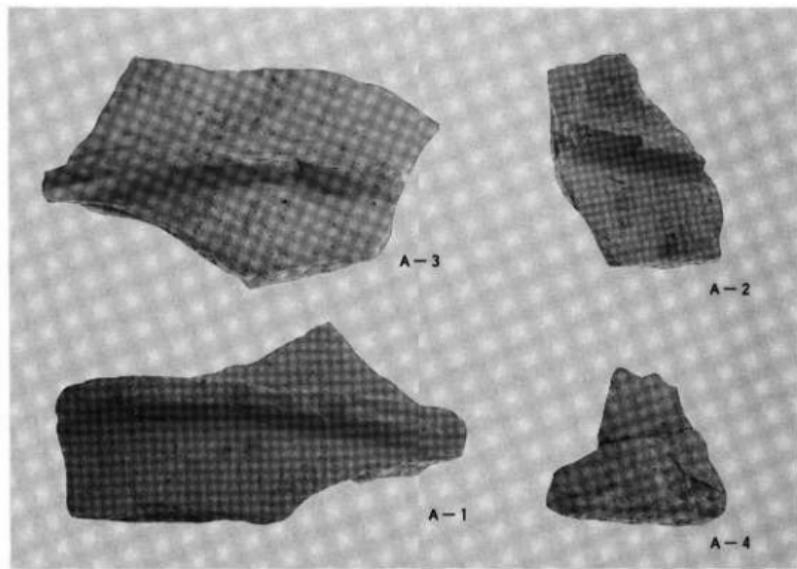
15



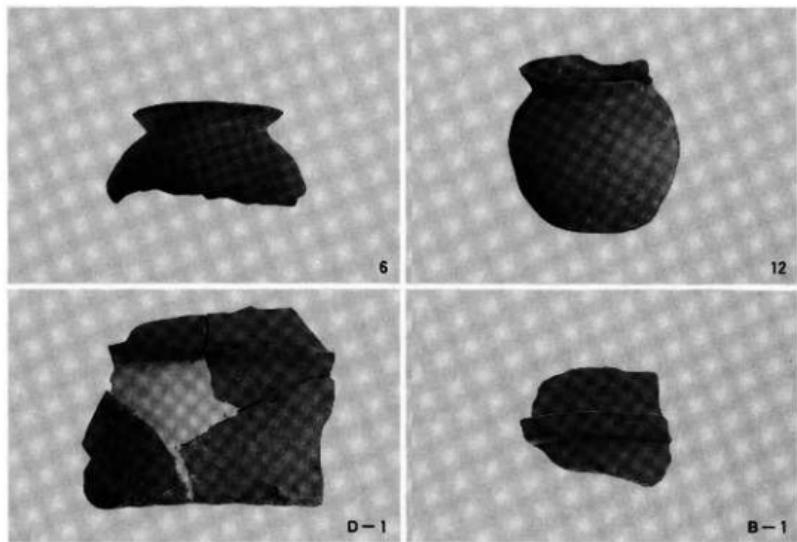
7



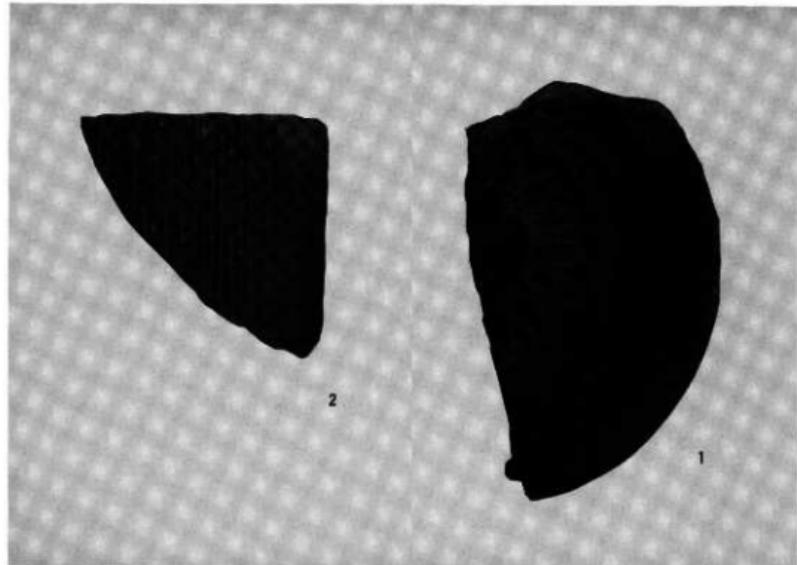
5



図版 19 中田遺跡 (91—293)



教興寺遺跡 (91—326)



八尾市文化財調査報告書26  
平成3年度公共事業

八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ

発行日 1992年3月

発行所 八尾市教育委員会

印刷 ㈱近畿印刷センター

